日本中國學會便り

2009年（平成21年）
12月20日
第2號
（通巻第16号）

［事務局からのお知らせ］

彙　報

第一回理事会（5月23日開催）での決定事項を受け、同日付で通信による臨時評議員会を開催した。報告事項は以下の通り。

・平成21年度日本中国学会賞受賞者の決定について
　［哲学・思想部門］該当者なし
　［文学・語学部門］該当者なし
・新入会員の決定について
　通常会員20名の入会希望があり、審議の結果、全員の入会を承認。

また、10月9日の評議員会における報告・審議事項は以下の通り。

［報告事項］
・理事長による会務報告
・会員動向について
・平成22年度学会報・学会展望編集担当校及び学術大会開催校について
　学会報編集担当校　神戸大学
　学会展望編集担当校　哲学／京都大学
　　文学／お茶の水女子大学
　　語学／関西大学
　学術大会開催校　広島大学
・各種委員会報告

［審議事項］
・平成20年度会計決算報告・監査報告
・平成21年度予算案について
・新入会員の承認
・第61回学術大会総会次第について

翌10月10日の総会において、評議員会の議決事項が報告された。

◎会費の納付について

会費未納の方は、至急ご送金願います。2カ年（平成20・21年度）未納の方には、本年度の学会報を送付しておりません。また、4年間滞納されますと除名処分となりますのでご注意ください。

郵便振替口座：00160-9-89927

◎退会の通知、住所等の変更について

退会ならびに住所・所属機関等に変更が生じた際は、速やかに事務局までご通知ください。通知は郵便・ファックスまたは電子メールにてお願いいたします。

メールアドレス：ssj3@wwwsoc.nii.ac.jp

◎論文執筆要領について

学会報第61集に掲載のものは、旧バージョンです。論文投稿の際には、この「学会便り」の裏表紙にある新しい執筆要領に従って提出願います。

第61回文教大学大会——雑感と補遺

理事長　池田　知久

第61回文教大学大会、成功裏に終わる

日本中国学会の第61回大会が、去る10月10日・11日の二日間、文教大学を会場として開かれた。数字上のことだけで恐縮であるが、大会参加者480名、研究発表者46名、懇親会出席者130名、という盛況ぶりで、大成功と言ってよい大会であった。

これも大会開催校の代表、謡口明先生を始めとする文教大学の先生方、学生の皆さんの熱意溢れるご尽力、及び学長、大橋ゆか子先生を始めとする大学首脳部の強力なバックアップのお陰と、心よりお礼申し上げます。

今年の大会には、心配なことが二つあった。一つは、大会時に台風18号が現地を直撃するかもしれないという心配。二つは、新型インフルエンザのために欠席される発表者・司会者があるかもしれないという心配である。これらの場合に備えて、文教大学には消毒薬とマスクを用意してもらい、また医療機関と緊急連絡できるように準備していただいた。

また、前日の10月9日の理事会には「近場」の理事に少し早めに来場してもらうお願いをし、10日・11日の二日間、理事長・副理事長が事務局控え室に待機して、緊急事態に備えることとした。

文教大学と学会本部の「人」の努力に対して、「天」も何ら災いを為すことができず、台風は9日に遠方に去り、新型インフルエンザに罹る発表者・司会者が一人も出なかったのは、まことに幸いであった。

上海師大との連携による『学会報』受賞論文集（中国哲学）の出版

本学会と上海師範大学の研究プロジェクト「海外中国哲学論叢」との連携による、『日本中国学会報』学会賞受賞論文（中国哲学部門）の、中国語の翻訳と中国国内における論文集の出版計画については、背景や途中経過を本誌『便り』2008年12月号でご報告した。また、その後（2008年11月～2009年10月）の経過については、大会時の理事会・評議員会においてご報告し承認された内容を、総会においてもご報告した。

27篇の授賞論文中、著者より許諾をいただいた22篇の中国語翻訳作業は、中国側で2009年に入って開始された。今、12月3日現在、22篇すべての校正ゲラが当方に届き、その内20篇の著者校正が終了している。当初考えていた予定と比べると、3ヶ月以上の遅れが生じているが、大体のところ2009年3月までに出版できるのではないかと思われる。

この試みが成功するか否かは、まだ判断する時期ではない。しかし、日本の中国文化研究を広く海外に発信することの必要性、それも個人個人が自分の論著について行うのではなく、日本中国学会が学会としてまとまって行うことの必要性は、大多数の会員の認めるところとなっている。

しばらくの後、この試みの成否をよく検討した上で、大きな問題がないようであれば、中国哲学だけでなく中国語学・文学についても色々な形で、日本中国学会として海外発信を計画してみてもよいのではなかろうか。

漢字・漢文ならびに東アジア文化の教育・研究に関する提言（案）

今年の大会では、理事会・評議員会において「漢字・漢文ならびに東アジア文化の教育・研究に関する提言（案）」を、字句・文言の若干の修正を条件に採択した。その後、総会で理事会よりこれを報告した（担当は将来計画委員会、堀池信夫委員長）。総会の議論では、この「提言」の有する意義について歓迎する発言が多かったが、その具体論が不十分だとする声もあった。

この「提言」は、堀池委員長の下、将来計画委員会が約3年間、煮詰めてきたものである。さらに遡るならば、2001年度、本学会が会則を大幅に改正して「将来計画委員会」が発足した時以来、この委員会でずっと検討してきたテーマであった。

合計1876名の会員のこの問題（中等・高等教育における漢字・漢文教育の一層の振興）に対する意見分布はまちまちであり、中にはこの種の「提言」の採択に反対される会員もいる。こういう意見も誤りというわけでは

なく、やはり一つの見識なのである。

また、この問題に関して、学会としての日本中国学会がどこまで踏みこんでいくべきかについても、まだ理事会・評議員会で合意に達しているわけではない。例えば、日本中国学会は、高度な理念や精神を示すだけに止めるべきで、具体的な実践活動は現場に任せるのがよいという考えもあるし、逆に全国漢文教育学会その他と一緒になって具体的な実践活動に取り組むべきだという考えもある。

こういうわけで、今回の「提言」は会員の大多数からコンセンサスの得られると思われる範囲に収めてあるが、会員のみなさんには、民主的な運営を至上とする学会である限り、こうした運営形態は改めるべきではないことを知っていただきたい。

いずれにしても、会員のご意見を幅広く汲み上げながら、おいおい具体論をさらに進めていくことになると思うが、会員のみなさんには是非ともご意見をお寄せいただきたいとお願いしたい（将来計画委員会・理事・事務局まで）。

本学会の会員増加を図って

統計記録によれば、現在、本学会の会員数は1876名であるが、最盛時の1998年には2077名を擁していた。この11年間で201名の会員減となったわけである。それも1998年以来ほぼ毎年減少し続けており、もはや座視することができない事態になっている。その原因はしっかりと分析しなければならないが、いずれにしてもこれは中国文化研究、アジア（東洋）文化研究、引いては人文学研究にとって憂うべき事態と言わなければならない。

そこで、理事会としては大会後の2009年11月から、会員増を図るための具体的な方策を取りたいと考えている。会員のみなさんにおかれては、周囲の中国文化研究・教育に従事しておられる大学・短大の先生、高専・高校の先生、大学院の学生、等々で、まだ本学会に未入会の方々がおられたら、是非とも「紹介者」となって入会を勧誘して下さるようお願いします。（なお、入会申込書は、本学会のホームページから取り出すことができる。）

大学院生の中には、入会したいのだけれど指導教授の許可が得にくいという方もいるようである。指導教授である会員の先生には、「紹介者」としての積極的なご推薦をお願いしたい。

なお、新入会員には特典として、本学会編『日本中国学会資料（1999年～2008年）』1冊をプレゼントする。このブックレットには、1999年～2008年の10年間の本学会に関する諸資料が集められている。それだけでなく、『日本中国学会報』第1集（1949年）～第58集（2006年）の58集の掲載論文の内、著者許諾済みの論文多数のCD版（PDF形式）が含まれている。非会員のみなさんには、この機会に奮って入会されることを呼びかけたい。

日本中国学会若手シンポジウムの開催（私案）

これは理事会・評議員会で決まったことではなく、現段階では、まだ二三の理事の間で議論されているに過ぎないことである。したがって、以下はあくまでも一つの私案でしかなく、実行に移されるか否かはまだ未定のものとしてお読みいただきたい。

どんな学会でもその未来は、若手研究者に掛かっている。本学会も例外ではありえない。ところが、最近、若手研究者、特に大学院生の入会希望が少なく、本学会の未来に心配がないわけではない。大学院生などの入会については、上述のような勧誘を計画しており、その他、経済的な優遇措置を取ることも理事会の話題には登っている。

それで、本学会の主催で、若手研究者（大学院生・助教を中心に40歳代以下を指す）だけが集まる、小さなシンポジウムを開催してみてはどうであろうか。主な目的は、若手の自由・闊達な発言を通じて中国文化研究を一層、活性化するためである。時期・場所・テーマ・費用・形態などについては、後で具体的に煮詰めていくことにして、再来年2011年3月を目途に一度、開催したいと私は希望している。

中国文化研究という学問は、一定の成熟度に達するためには相当の年季を掛けることが必要である。そのために、この分野のさまざまの研究会議において、中堅研究者や老大家のいる前では、若手が萎縮してしまって討論などでも沈黙しがちである。本当のことを言うと、こういう状態を若手が自ら克服して、自由・闊達な発言を敢行しなければ学問の未来は期待できないのではある。しかし、そうした方向に行く一つのきっかけを見つけるためにも、若手だけが参集して、心置きなく話し合う機会を作ってみてもよいのではないかと言うのである。是非、有志の会員が名乗り出ることをお願いしたい。

科學學國際シンポジウム —第5回“科學制と科學學”シンポジウム—
（國際科舉研討會—第五屆“科舉制與科舉學”研討會）

北海道大学　佐藤　錬太郎

2009年8月27日（木）・28日（金）に北海道大學の百年記念會館及び人文・社會科學總合教育研究棟において、科舉學國際シンポジウム—第5回「科舉制と科舉學」シンポジウム—が開催されました。シンポジウムの主題は「科舉と中華傳統文化」です。

このシンポジウムは、北海道大學大學院文學研究科中國文化論講座（代表：佐藤錬太郎）主催、東北大學大學院文學研究科中國文化學講座（代表：三浦秀一）共催で、平成21年度の科學研究費補助金基盤研究（B）：佐藤錬太郎「科舉に關する文獻學的總合研究」および三浦秀一「思想史的社會史的史料としての科舉答案に關する基礎研究」より資金の給付を受けています。併せて平成21年度北海道大學大學院文學研究科シンポジウム助成、中國「中華炎黄文化研究會科舉文化專業委員會」（代表：張希清）及び臺灣國家科學委員會研究計畫「清代經典詮釋方法與理論的轉向」（代表：鄭吉雄）の協力、北海道中國哲學會の後援を得て開催したものです。

北大中國文化論講座と東北大中國文化學講座は、鄭吉雄教授主宰の「經典詮釋中的語文分析研究計畫」を通じて、相互の研究交流を進めてきました。2006年8月には、北大中國文化論講座を代表して筆者は臺灣大學中國文學系の鄭吉雄教授の主宰する臺灣國家科學委員會專題研究計畫「清儒經典詮釋方法與理論的轉向研究計畫」との合作協定を結びました。

また、2006年12月に中國科舉學會の劉海峰教授と鄧洪波教授を招聘し、北大で科舉學に關する講演會を開催した折りに、兩教授より、研究交流を深めたいという提案があり、研究水準を高めるため、2009年に中國科舉學會の主要メンバーが自費で來日し、北海道大學で開催する科舉學の國際シンポジウムに參加する、という約束をしました。

この國際シンポジウムに中國および臺灣の研究者を招聘できたのは、偶然ではなく、長期にわたる學術交流の成果と言えます。シンポジウム開催にあたり、北京大學歷史系主任の張希清教授には中國の研究者への連絡を、臺灣大學中文系の鄭吉雄教授には臺灣の研究者への連絡を、東北大學の三浦秀一教授には日本人研究者への連絡を委囑しました。

シンポジウム開催に當たり、北大中國文化論講座では、弛和順教授には開催準備を、近藤浩之准教授には報告論文集（中國語版）の編集を、水上雅晴助教（本年10月から琉球大學教育學部准教授）には連絡事務全般を擔當していただきました。シンポジウムが圓滿に開催できたのは、同僚各位と學生諸君の協力によるものと、心より感謝しています。

筆者の開會の挨拶の後、望月恆子北大大學院文學研究科長、張希清北京大學歷史文化研究所長、劉海峰厦門大學教育研究院院長より祝辭が披露されました。中國および臺灣でのシンポジウム開催形式に準じて、報告論文集に掲載する摘要と論文、口頭報告は原則として中國語を用いることとし、各位20分の發表時間で、下記の日程で開催しました。

8月27日午前【專題報告】

①劉海峰（厦門大學教育研究院院長）：
“策學”與科舉學

②李弘祺（臺灣國立交通大學）：
科舉與中國宗族組織的改變

③三浦秀一（東北大學大學院文學研究科教授）：
明代科舉「性學策」史稿

④張希清（北京大學歷史文化研究所所長）：
“一切以程文爲去留”——唐宋進士科録取依據的演變

⑤呉國武（北京大學中國古文獻研究中心副教授）：
“策問宜用經義”——科舉文體與北宋經學新變析論之一

⑥何忠禮（浙江大學歷史學系教授）：南宋武舉論略

8月27日午後【分組會議A】

①龔賢明（浙江大學古籍研究所原所長）：
北宋徽宗朝“貢士”與“進士”考辨—兼評《皇宋十朝綱要》編撰體例

②李占倫（天津市教育招生考試院研究員）：
同治閩省汀州府、長汀縣科舉考試文牘發微
③張亞群（厦門大學教育研究院教授）：
科舉考試與漢字文化——兼析進士科一支獨秀的原
④櫻井智美（明治大學文學部准教授）：
元代慶元的士人社會與科舉
⑤渡邊健哉（東北大學大學院文學研究科助教）：
元代科舉禮儀小考——以《永樂大典》所引《經世大典》爲線索
⑥鄧洪波（湖南大學嶽麓書院教授）：
明代書院的科舉之會與科舉之學
⑦宋方青（厦門大學法學院副院長）：
科舉革廢與清末法政教育
⑧張學智（北京大學哲學系教授）：
陽明學與明代中後期的制義
⑨金原泰介（臺灣開南大學助理教授）：
明末文社之思想及其影響——以幾社之八股文爲考察中心——
⑩加部勇一郎（北海道大學大學院專門研究員）：
《鏡花緣》的"女試"

8月27日午後【分組會議B】
①熊本　崇（東北大學大學院文學研究科教授）：
宋紹興對策二種——周必大的省試對策與王十朋的殿試對策——
②飯山知保（早稻田大學文學學術院助教）：
金代科舉制度變遷與地方士人
③錢　明（浙江省社會科學院哲學所研究員）：
科舉制與陽明學的興起
④李世愉（中國社會科學院歷史研究所研究員）：
"不准臨場條奏"——清代保持科場穩定的重要舉措
⑤徐興慶（國立臺灣大學日本語文學系教授）：
試論朱舜水對科舉制的評價
⑥裴淑姬（韓國慶尚大學校人文學研究所教授）：
朝鮮半島士人在中國參加科舉考試的一些問題研究
⑦鶴成久章（福岡教育大學教育學部教授）：
明代會試的判卷標準考
⑧大野晃嗣（東北大學大學院文學研究科准教授）：
明代進士登科録編纂試論
⑨金瀅坤（首都師範大學歷史系副教授）：
試論唐代制舉試策文體的演變
⑩水上雅晴（北海道大學大學院文學研究科助教）：
清代科舉與策問——考官重視策問的實態以及漢學家官員的"再生産"

8月28日午前【專題報告】
①甘懷眞（國立臺灣大學歷史系教授）：
從科舉制論中國文化中的公平觀念
②毛佩琦（中國人民大學歷史學院教授）：
明代的國子監祭酒
③近藤一成（早稻田大學文學學術院教授）：
明州・慶元府士人社會的形成與展開——以豐氏爲個案：从豐稷到豐坊
④鄭吉雄（國立臺灣大學中文系教授）：
章學誠官師合一説及其對清代科舉的批判

閉幕式では、李弘祺教授、李世愉教授が會議を總括、主催者側代表として三浦秀一教授、筆者が閉會の挨拶をしました。その後、洞爺湖湖畔亭に移動し、研究交流會議を開き、中國で報告論文集を出版する計畫について參加者の合意を得ました。

今回のシンポジウムの報告論文集（A4版、厚さ2.5cm）は、北大中國文化論講座で保管していますので、閲讀を希望される日本中國學會會員には、返信用封筒と郵送料（重量1.2kg）を添えて申し出てくだされば、殘部を進呈いたします。なお、今回のシンポジウムは、歷史学の枠に捉われず、制度、教育、文學、思想、社會史など廣範多岐に涉りました。報告內容については、インターネット上に公開されていますので參照して頂ければ幸いです。來年度の科舉シンポジウムは、日程未定ですが、李弘祺教授の主催で臺灣で開催される予定です。

王維・輞川国際学会に参加して

厦門大学　郭　　穎

2009年5月初旬、三千年の歴史を誇る古都西安では、二つの大きな催しがあった。一つは、5月9日に仏教の聖地・法門寺で行われた盛大な仏舎利塔の落成式典である。僧侶や専門家、著名人をはじめ三万人が集まったという。もう一つは、5月9日から11日にかけて、西安水晶島酒店で開催された王維・輞川国際学会である。正式には、「王維・輞川国際学術研討会暨中国王維研究会第五届年会」という。国内外から44の大学や出版社などの代表72人が集まり、約50篇の論文が発表された。日本中国学会の会員で参加したのは、内田誠一氏、高倩芸氏、郭穎の3名である。

初日、さみだれの中、王維研究会会長である西安文理学院の師長泰教授の司会で学会は始まった。西安文理学院の党委書記で常務副院長の門忠民教授が開幕の挨拶をし、学術顧問の霍松林教授、名誉会長である中国社会科学院の陳鉄民教授、理事である遼寧大学の畢宝魁教授などが式辞を述べた。

開幕式に続き、午前中、大会の基調報告が行われた。会場の印刷機が故障したため、発表資料が配布されなかったのは残念である。中国国家図書館の王麗娜氏（「国外学界近年対王維的研究」）は、近年海外で発表された王維の論文を詳しく紹介し、王維研究が盛んになっている情況を伝えた。中国社会科学院の陳鉄民氏（「新訳王維詩文集導読」）は、『新訳王維詩文集』の章立てと内容を紹介し、王維の文学的地位、思想、また歴史的貢献についても言及した。香港城市大学の董就雄氏（「論朝鮮李睟光『芝峰類説』評王維及解王維詩諸条」）は、朝鮮・李睟光の『芝峰類説』を取り上げ、王維に関する評語を分類し新たな解読を行った。そして「桂花」の語を例として、李睟光が王維の詩における表現・典故・意境などを考察し、独自な見解を示していたことを指摘した。台湾政治大学の侯雅文氏（「劉辰翁・顧璘訳王維詩」）は、劉辰翁と顧璘の王維詩に対する評語を分析し、元明時代における王維受容の変遷も考察した。韓国・釜山大学の金世煥氏（「継承中国伝統的『画聖』」）は、中国の伝統思想と関連させ、王維の絵画と詩に対して見解を述べた。日本・安田女子大学の内田誠一氏（「『蕭和尚霊塔銘』之新考」）は、嵩山南麓の嵩岳寺に残る石刻「蕭和尚霊塔銘」の碑陽・碑陰の復元を紹介し、そこに刻されている王維の詩に関する研究成果について論じた。東華大学の高倩芸氏（「藍田輞川与桃花仙源、仏国之水」）は、王維の時代背景と文学作品に基づき、王維の目からみた輞川の様子を再現しようとした。そして王維の輞川開発について考察するには、〈仏教の深度〉〈道教の仙気〉〈儒教の品格〉という三つの要素が重要であると主張した。

お昼の宴席では、発表者達は主催者の西安文理学院の先生方と盛んに杯を交わしながら、ご当地の西安料理に舌鼓を打った。そんな和気藹々としたムードが醸し出された後、休憩をはさんで午後のグループ発表が始まった。

グループ発表は、午後14時半から3時間行われ、一人あたり10分の持ち時間であった。発表者は三つの会場に振り分けられ、各会場にそれぞれ座長二人と、発表者が二十数名。ある会場では、自分の発表に夢中になって滔々と喋り続ける人がいた。すると座長はペンで机を軽く叩いて時間の注意を促し、やがて「発表のまとめに入りなさい」と口頭注意。なおも喋り続ける発表者に「今終わらせないと罰金を取るよ!」と冗談まじりに強制終了させた。ところが議論を誘うような話題になると、注意する側の座長も我を忘れ、思わず白熱した討論に巻き込まれてしまうことも屢々であった。

第一グループでは、信陽師範学院の徐伯鴻氏（「対王維詩歌芸術特色的再認識」）が、王維晩年の心理を論じ、福州大学の頼愛清氏（「從『帰心』看王維詩歌的本真言説」）は、王維の詩作に見られる「帰心」の境地を荘子の「逍遥遊」と比較しながら、王維詩の「本真」を探ろうとした。またこのグループ

では、王維の心理や、王維と養生などの話題でも盛り上がっていた。座長の畢宝魁氏は、宋代の秦観と黄庭堅の話から、王維の詩に人の心を癒やす効果があることを指摘し、特に心の病を抱えた現代人は王維の詩を読むべしと強く主張した。西安文理学院の雒莉氏（「関於王維的貶適詩」）は、王維の詩に見られる喪失感、屈原の影響、及び隠遁思想の変化などについて、心理学的アプローチを試み、新たな角度から王維の詩を考察した。

第二グループでは、安徽大学の呉懐東氏と黄山書院の周振華氏（「王維、孟浩然送別詩比較論」）が、王維と孟浩然の送別詩にみられる相違点を三つ挙げた。その一つは、送る相手の相違。王維の送別詩には上級官吏を送る作品が多いのに対し、孟浩然の詩には下級士人へのものが多い。二つめは、表現上から見れば、王維の詩には意象と実景の手法が交錯して使用されているが、孟浩然は実景のほうをより重んじている。三つめは、内容の面でバラエティに富んだ孟浩然の詩と比べ、王維の詩は変化に乏しいことが挙げられた。王維と孟浩然の異同について、参加者の意見がどんどんぶつかり合い、白熱した議論が展開されていた。

第三グループでは、襄樊学院の王輝斌氏（「王維的仏教詩及其文学史意義」）が、王維の仏教詩を更に仏理詩、仏語詩、禅趣詩の三つに分け、禅宗の美学からそれぞれの特徴をまとめた。陝西師範大学の王作良氏（「明顧起経本『類箋唐王右丞詩集』版本価値考論」）は、顧起経本が後世に大きな影響を与えたことを指摘し、その研究価値が高いことを主張した。広西大学の董艶秋氏（「從歴代論詩絶句看王維接受」）は、歴代の論詩絶句における王維及び王維詩の評価から、受容史に見られる時代的変化を明らかにした。師長泰氏（「王維輞川別業的園林特徴」）は、藍田の輞川別業を調査した上で、その〈天然性〉〈開放性〉〈芸術性〉を指摘した。なお郭穎は、王維やその他の詩人・僧侶の禅詩に関して、日本の江戸時代の僧侶がどう解釈したのか、またそれは中国における解釈とどう違うのかについて論じた。

二日目の午前は、藍田県政府の責任者の先導で、王維の輞川荘を見学した。輞川荘は、西安市藍田県の東南約20キロにある軍事施設内に位置する。普段は立入禁止区域となっているが、今回は市役所から特別に許可が下りたお蔭で、その一部を見学することが許された。ただ、撮影禁止区域が多く、観光スポットに着くまで、途中下車は禁止された。雨天の中、観光ミニバスが砂利道をガタガタと大きく揺れながら走った。まるでエンジン起動中のタイムマシーンの如く、我々を連れて、王維の時代へタイムスリップしてしまうかのようだった。雲雨に隠れて、人を誘うように高くそびえ立つ青山、優雅に流れる透き通った白川。生きた「輞川図」が、今、目の前でどんどん広がっている。「冬鶯 むかし王維が垣根哉」、車窓を眺めながら、なぜか与謝蕪村の辞世の句を思い出した。三十路を越えた筆者も思わず、煩雑な現実社会から離れ、千年前の輞川荘に行きたい衝動に駆られてしまった。暫くするとバスはある村に入った。歴史を感じさせる古い民家がずらりと建ち並んでいる。ほとんどが二階建ての一軒家だった。門の上や屋根の頂きに小さな鏡がはめ込まれていて、日本の神社の神鏡を連想させ、村全体が神秘的な雰囲気を漂わせていた。ただ一つ、何もせずに道端でぶらぶらしている村人が気になった。この魅力溢れる絶景とは、まったく調和が取れていない。同行の先生によると、村の住民は貧乏だが、政府から救済金がもらえるので、働かなくても生活はできるそうだ。中国の俗語を借りて表現すると、「扶貧扶貧、越扶越貧」ということだろう。

午前中の観光はあっという間に終わってしまった。天気が悪いせいか、結局「輞川二十景」には殆ど連れて行かれず、王維手植えの銀杏と市役所のお手洗ぐらいしか見学できなかった。王維手植えの銀杏、昔はこの前で記念撮影できたそうだが、現在は禁止されており残念だった。午後は西安市内に戻り、大唐芙蓉園や曲江池遺跡公園など、盛唐の様子を再現した文化テーマパークを参観し、ライトアップされた西安の現代的な一面も味わえた。

最終日の午前は、グループの座長が、それぞれのグループ発表の内容をまとめ、大会交流発表会も行われた。第一グループの畢宝魁氏（「談王維的儒家情懐」）は、王維の儒教思想を検討し、唐代の詩人の中で、孔子と一番似ていると感想を述べた。ただ一人、大学生として参加した重慶師範大学の譚荘氏（「王維早年奉仏参禅辨」）は、王維の作品の年代を考察することによって、仏教を信仰したのは早年の

ことであると証明した。第二グループの復旦大学・陳允吉氏（「王維『鹿柴』詩与大乗中道観」）は、王維の「鹿柴」詩を張継の作品と比較しながら、二人の異同を分析し、王維詩における「有」と「無」の関係を解釈した。寧波大学の李亮偉氏（「再談王維的『天機清妙』」）は、「山中與裴秀才迪書」にみられる「天機清妙」は裴迪を評した語であるが、王維自身がその資質を備えていると自任していたと考えられると主張した。第三グループの西安文理学院の張進氏（「宋金元王維接受研究」）は、宋・金・元の詩話を中心に、時代背景などを考えながら、王維の評価と受容を考察した。

今回、若手学者と中堅学者を中心に、王維の詩や思想について活発な意見が交わされたことは、非常に印象的だった。また、美学の視点や心理学的アプローチの試みも見られ、王維研究の新境地が感じられた。特筆すべきは、第三グループの討論を発端として、「王維の受容研究グループ」が発足したことである。有志によって王維の受容研究を全面的に整理していくことになったらしい。

一方、残念な点もいくつかあった。一、一人あたりの時間が短すぎて、ほんの触りしか発表できず、少し物足りない感じがした。二、発表資料が配布されてないため、発表者の方言により、発表内容が聞き取れないことが多い。従って、研究内容を充分理解した上での、発表者との深い交流ができなかった。三、王維を賞賛する内容が多く、重複した発表も少なくない。四、グループ分けがランダムなので、研究の類似している人達が別々の会場に置かれ、直接意見を交わすことができなかった。そのため、グループ討論の主題が絞られず、話題があちこちに移り、散漫な印象が否めなかった。次回に向け、これらの点について、主催者側の先生方にご一考いただければ幸いに思う。

最後になったが、今回の学会は国際学会と銘打ちながら、海外からの発表者がほんの僅かであった。今後は海外から、とりわけ日本から多くの研究者が参加され、本当の意味での交流と切磋琢磨が行われることを強く望んでやまない。この学会については、http：//wenxue.xawl.org/News_View.asp?NewsID=375をご参照されたい。

「雨の輞川にて」（左から高倩芸氏、内田誠一氏、筆者）

中国留学と家族制度への関心

駿河台大学非常勤講師　仙石　知子

わたしは、高校を出てすぐ南開大学に留学し、中文系を卒業しました。高校で中国語を勉強していたこと、父の仕事の関係で中国の服飾に興味があったことが理由です。一年あるいは二年で帰国する語学留学ではなく、中国の大学の本科を卒業することは、現在でも珍しいようなので、その暮らしの中から、わたしが感じたいろいろな中国を綴ってみたいと思います。

高校生のとき、中国語を週に9時間勉強していた、と言っても、いきなり中国の大学の授業についていけるはずはありません。これは、ある程度、覚悟していたことでした。しかし、実際に行ってみると、授業の進み具合の早さ、出されるレポートの多さは、想像を超えるものがありました。そのとき、いえ、わたしが卒業できたのは、同学たちのおかげでした。ノートを見せてくれ、発表原稿に手を入れ、試験勉強を一緒にしました。

生活面でも、同学なしでは生きていけませんでした。わたしが留学したのは、天安門事件があった1989年からで、まだ糧票が残っていました。今のように物資も豊富ではなく、牛乳一つ買うのでも、いつどこにどのように牛乳が売られるか、という情報を同学からもらわなければ、何一つ手に入らなかったのです。ただし、同学の部屋に行くことは、公的にはできませんでした。同学がわたしの宿舎に来る場合には登記が必要で、それをしたとしても、留学生に繰り返し会った場合には、当局からマークされると警戒していました。天安門事件の年であったことが、同学との交流を制限しており、中国という国家の専制権力を肌身で感じることができました。それでも、同学たちとの他愛もないおしゃべり、それが現在の語学力の基礎となっています。

もちろん、すべてが順調であったわけではありません。一時帰国するためのチケットを北京に買いに行き、北京から汽車で天津に戻ろうとしたときのことです。わたしは、疲れから降りるべき天津を寝過ごしてしまいました。次に到着する駅は、約8時間後の済南のはずです。天津駅には、迎えの人も来てくれていました。そこで、何とか連絡を取ろうと女性の車掌さんに頼んでも、「馬上就到」と答えるだけで、取り合ってくれませんでした。「馬上就到」の割には、次の駅に着く気配も全くありません。本当のことが知りたかったわたしは、硬座の車両まで行き、纏足のおばあさんに聞いたところ、やはり済南まで止まらないと教えてくれました。

車掌さんにその旨を問うと、今度は、済南に着けば天津への折り返しの汽車がすぐにある、と言われました。済南に着いた途端、折り返しの汽車を探して駆け出したわたしを、大勢の人々に囲ませて止めた車掌さんは、すぐにある、と言った言葉をごまかすため、さらにくどくどと話を続けます。なんとか振り切って、汽車を片っ端から調べましたが、折り返しの汽車はすぐにはなく、結局、天津に戻ったのは、夜中の二時でした。南開大学の留学生弁公室は、事故にあったのではと心配して駅まで人を出し、大学でも大騒動になっていました。もちろん悪いのは、寝過ごしたわたしです。ただ、そのときのわたしには、ごまかされたことの方がショックでした。なぜ、ウソをつき、そのウソを糊塗するためにごまかしを重ねていくのだろうと。

この後も、自分に都合が悪い場合に、変にごまかそうとする対応に、たびたび翻弄されました。なぜ、本当のことが言えないのだろう。長く暮らしている間に、これが中国人の智慧なのかな、と気づきました。強烈な国家権力と社会からの強い圧力の中で生きていくために、自分の身を守るための手段なのではないか、と考えたのです。それ以降は、こうしたことがあっても慌てずに対応できるようになったと思います。

その証拠に中国では、一旦親しくなれば、こうした権力の圧力やごまかしとは別の、濃密な人間関係を結ぶことができます。南開大学の魯徳才老師から

は、学問上の教えを受けるとともに、自宅に招かれ餃子をご馳走になり、さらには自分の子供のように可愛がっていただきました。そうした折々に、中国人の家庭を見て興味深く思ったことは、家の中における女性の強さでした。男性も積極的に家事をこなします。日本でも、最近はゴミ出しをする夫が多くなりました。でも、そうした場合、立派なだんなさんね、という評価がついてきます。しかし、中国の男性は、それを当たり前のように行い、社会もそれを当然としている。それは、こうした家族の関係が長い間続くことによって作り上げられてきたのではないか、と思ったのです。

高校生の時に読んだ世界史資料には、毛沢東が中華人民共和国をつくるまでは、「うどんは飯ではない、(そのように) 女は人ではない」と言われるほど女性の地位は低かった、と書いてありました(今回、調べたところ、仁井田陞『中国の伝統と革命』1が典拠でした)。しかし、わたしが見た中国の家族の在り方は、たかだか50年ほど前の中華人民共和国の成立を機に、女性の地位が高くなったものとは思えませんでした。革命の賛美のために女性の地位が革命的に変わったように主張しているだけなのではないか。中国の旧小説の中に描かれている女性の姿を読んでいくことを通じて、中国の家族制度を解明してみたい、と思うようになりました。

高校生のときに、アメリカではなく中国への留学を選んだのは、同じ漢字を使い、長い文化の交流を持つ中国が身近に思えたからでした。ところが、日本と中国とはまったく違う。その当たり前の事実に気がつくとともに、それを生み出した中国社会の根底、すなわち家族制度の在り方に興味を持ったこと、これが留学生活を通じて最も印象に残った中国の姿でした。中国人でないからこそ、それを異質に感じられる自分が、それを解明していきたい。しかし、それを学問的な方法論として昇華させるには四年間は短すぎたため、日本に戻ったあとも勉強を続けようと決意しました。単位を早く取得したため卒論だけ残して、日本の中国研究の方法も学ぶために、一年早く帰国しました。中国の大学には教養課程がなく、一年次から専門の授業があるにも拘らず、ゼミ形式で少数の学生を指導することはなかったのです。そこで魯老師の紹介状を持って、東京大学の丸尾常喜先生を訪ねたところ、快く聴講を許していただき、丸尾先生にご紹介いただいた大木康先生からも、卒論へのアドバイスをいただきました。

卒論を書いた後、いろいろな大学院を受験して、中国の家族制度に関心を持った経緯を説明したのですが、もっとも興味を持ってくださったのは、溝口雄三先生でした。そこで、溝口先生に指導を仰いで大東文化大学で修士論文を書き、溝口先生のご退職後は、小川陽一先生に就いて、明清小説に現れる家族制度に関する博士論文をまとめました。今は、『三国志演義』を題材として、苛烈な戦いの世界の合間に垣間見られる家族の在り方から、明清時代の社会を考えようとしております。わたしの留学は、中国の家族制度という生涯の研究テーマを定める契機となった大切な経験なのです。

各種委員会報告

[大会委員会]

委員長　竹村　則行

日本中国学会第61回大会は2009年10月10―11日、元荒川沿いの風情ある埼玉越谷の文教大学で開催された。5分科会46名の研究発表に併せ、岡本さえ氏の講演、図書館の『史記』資料展示もあり、内容の濃い大会であった。参加者は477名、さすが日本の中心たる関東地区の底力を示した。謠口代表、阿川準備室長始め、一丸となって周到に準備された文教大関係者に改めて感謝する。

さて還暦を過ぎた本学会は時代の流れの中で種々の問題を内包する。その大きなものは会員数の減少である。その背景には院生数の減少や伝統中国学職場の減少があり、更にその背景には戦後日本の過度の欧米科学技術追従の政策がある。これら問題の解決には時間を要するが、会員諸氏の研究発表や学会大会への積極的参加があれば、難局の打開は決して不可能ではない。

このような情況下、本学会や大会のあり方も修正を迫られており、中国学DC院設置の大学でも必ずしもすんなりと開催できない場合もある。その中で今回の文教大開催は賞賛に値する。幸い向こう3年、62回広島大、63回九州大、64回大阪市大での開催が決定しているのは喜ばしい。

学会大会の基本は研究発表であるが、分科会や講演シンポ等のプログラムは常に開催校を悩ませる。今回大会から大会委がより積極的に助言を行うことになったが、今後も開催校と相談しつつ、魅力あるテーマの設定、関係学会との連携等に取り組みながら、学会の隆盛に努めたい。

次回62回大会は2010年10月9―10日、東広島市の広島大学で開催される。多数の会員が共に元気に集い、西条の銘酒を汲み交わしつつ、学会の将来について存分に語り合いたい。

[論文審査委員会]

委員長　土田　健次郎

『日本中国学会報』第61集掲載論文の編集に関しては、総じて順調であったものの、いくつかの問題も発生した。

まず修正原稿の枚数が大幅に超過したものが複数あった。採用論文は査読者3名の指摘をもとに修正を加えるため、どうしても枚数が増加する傾向がある。今回は修正原稿の枚数が大幅に超過した執筆者に、急遽枚数の削減をお願いしたが、次回からはこのことを掲載通知を出すと同時に、執筆者に確認し徹底する予定である。

また、『日本中国学会報』第61集掲載の「論文執筆要領」が、一昨年の学会報に載っている古いバージョンになってしまっていた。論文審査委員会と編集担当校の間で最新版について確認をしていたのに、なぜかこの事故が起こってしまったのは残念である。

「論文執筆要領」はついては、10月10日に開かれた本年度第1回論文審査委員会で、さらに修正を加え、10月11日の理事会で承認を得た。なおその内容については10月9日の評議員会で修正方針を説明し、一任の許諾を得ている。最新版は本「便り」と学会ホームページに載せているので、来年の論文投稿はそちらに準拠されたい。

今回の「論文執筆要領」の修正箇所は、若干の字句の統一のほかは、「原稿提出」の項の16の追加である。後者の追加は、以下の情報を得るのが目的である。①投稿者とスムーズに連絡を取る、②査読者が投稿者の関係者となることを避ける、③40歳を若干こえている者でも、社会人入学などのため研究期間が短い場合は、学会賞専攻対象にする。これらについては以前から十分に配慮してきたが、さらに徹底するためにこの項を設けた。

次の第62集の依頼論文執筆者は次の各会員を理事会に推薦し、承認を得た。

哲学・思想部門（評議員）　神塚淑子
（一般会員）　中　純夫
文学・語学部門（評議員）　白水紀子
（一般会員）　芳村弘道

今年度の学会賞は、哲学・思想部門、文学・言語部門の両方との該当者が出なかった。両部門とも受賞者が無いというのは珍しく、理事会の提案を受け、この賞が奨励賞であることに鑑み、絶対基準を固定化するよりも、対象候補の中で最も優れたものにあたえる方向で議論することになった。

また、日本学術振興会奨励賞推薦者は、今年度も該当者無しとの結論となった。

今後の本委員会日程は次の通りである。

第2回委員会

2010年1月30日（土）あるいは1月31日（日）（在京委員及び副委員長のみ）

査読者・閲読委員の選定。

第3回委員会

2010年3月28日（日）

第62集掲載論文・第63集依頼論文執筆者・学会賞候補者・学術振興会奨励賞推薦者の決定、等。

［出版委員会］

委員長　富永　一登

出版委員会は、『日本中国学会報』（10月刊）と「学会便り」（4月と12月の年2回刊）の刊行を担当しています。今年と来年の『日本中国学会報』の編集担当校は神戸大学（釜谷武志委員）です。論文審査委員会、事務局、モリモト印刷と随時連絡を取りながら、5月から9月まで、その任に当たってもらっています。ご苦労の甲斐あって、今年も大会開催前に会員のお手元に郵送することができました。

『日本中国学会報』に掲載されている学界展望は、哲学・文学・語学の各部門の執筆担当校に展望記事と目録の原稿をお願いしています。今年の哲学部門の担当校は、北海道大学（弛和順委員）で、来年から2年間は京都大学（池田秀三委員）です。文学部門は、お茶の水女子大学（和田英信委員）が今年と来年の担当です。語学部門は、今年が神戸市立外国語大学（佐藤晴彦委員）で、来年から2年間は関西大学（内田慶市委員）になります。

学界展望の原稿は、出版委員会で読み合わせをして、その意見を踏まえて加筆修正したものを『日本中国学会報』に掲載することにしています。今年は、7月25日（土）に京都大学文学研究科小会議室をお借りし、川合康三副理事長にも出席していただき、委員会を開催しました。

委員会では、業績の自己申告件数が極めて少ないことが話題となりました。これについては、理事会にもはかり、部門別に自己申告用のアドレスを作って学会のホームページでも受け付けるようにしました。本号の「学会便り」にも、案内を掲載しています。なお、4月号に掲載する「国内学会消息」の原稿に関する案内も掲載していますので、あわせてご協力よろしくお願いします

「学会便り」の記事も委員会で検討し、各委員を通して原稿依頼を行っています。編集は、本号と来年4月号を富永が、来年12月号と再来年4月号を平田昌司副委員長が担当します。「学会便り」に掲載を希望される場合は、各委員にご連絡いただければ幸いです。会員のみなさまの投稿をお待ちしています。

[選挙管理委員会]

委員長　神塚　淑子

10月10日、大会開催中の文教大学において、2009年度第1回選挙管理委員会を開きました。来年度に実施される次回の評議員選挙について審議し、次の事柄を確認しました。

1. 評議員選挙は通例どおり、6・7月に実施することとし、その作業日時と場所を決めました。
2. 昨年10月の理事会・評議会において、選挙規約の「10名を連記」が「10名以内を連記」に改正されました。これをふまえ、今回発行された新しい会員名簿・学会報に記載の選挙規約では、「以内」を加えた文に改正されています。若い会員の方にも投票しやすくして投票率の向上をはかるというのが改正の趣旨です。選挙管理委員会としては、投票率の向上はもちろんのことですが、投票総数を上げるために10名以内の場合でもできるだけ10名に近い数の名前を連記してほしいということがあり、それを会員の皆様にわかりやすく伝えるには、選挙の時に郵送する文書の「選挙要領」の文面をどのようにすればよいか、引き続き考えていくことになりました。
3. 評議員選挙の時に会員に郵送する文書の裏面に「対象外会員名簿」を掲載しており、その下に「退会者」の欄があります。前回の選挙では、退会者が多数に上るために全員の名前を載せることは難しく、満70歳以上の退会者のみを記載しましたが、載せるか載せないかの線引きをどこでするかは、なかなか難しいというのが実情です。そこで次回の選挙では、退会者の名前は一切記載しないことにしました。

[研究推進・国際交流委員会]

委員長　藤井　省三

今期の研究推進国際交流委員会は、以下の委員・幹事により構成されています。なお（　）内に新任・留任・専攻・所属などを記しました。

藤井省三　委員長（留任、文学、東京大学）
吾妻重二　副委員長（留任、哲学、関西大学）
福山泰男　委員（新任、文学、山形大学）
古屋昭弘　委員（留任、語学、早稲田大学）
松村茂樹　委員（留任、文学・芸術、大妻女子大学）
王俊文　幹事（留任、文学、東京大学大学院生）

本誌前号でご報告しましたように、本委員会は前年度に理事会に対して提言（一）「若手会員研究発表活性化のための小部会制および分科会方式の試行」および提言（二）「中国学関係学科入学者増加のための大学受験生に対する広報活動：啓蒙的中国学講演の講師を予備校に派遣する案」を提案しました。

しかし慎重審議の結果、提言（一）は小部会制および分科会方式による一部の報告の時間延長は、学会会員の平等の原則に反する懸念がある、という理由で見送りとなりました。また提言（二）は予備校への講師派遣は、たとえ啓蒙的中国学講演のためであっても、学会会員勤務先の大学等が許可しないであろう、という理由でやはり見送りとなりました。

そのため本委員会は今年度に入って、これまでEメール会議を数回、大会時の本会議を一回開きまして、新たに以下のような提言をまとめました。

近年日本中国学会会員数は減少傾向にある。その背景には会費負担、大会での発表機会の不足による大学院生ら若手研究者の未入会、発表テーマの制限などによる隣接分野の研究者の未入会等が考えられる。

またそもそも各大学における中国人文学関係学科への入学者数が横ばいである。これは中国人文学関係学科の廃止の背景となっており、さらには院生数の横ばいあるいは減少の原因となっている可能性もある。

そこで本委員会は10月10日の会議で協議した結果、理事会に以下（1）～（4）の4点の改革案を提案申しあげたい。

（1）院生会費の引き下げ

7000円の年会費は院生にとっては少なからぬ負担であるため、院生会費を3000～4000円に引き下げることにより、院生会員の増加を目指す。またこれにより、隣接分野の学会所属の院生研究者は、本学会への入会が容易になることであろう。

（2）新たな「第X部会 日本漢詩文」など新部会の設置

日本漢詩文研究は国文学の分野に属しているが、日本比較文学研究という視点から考えると、中国文学研究の一領域とも言えよう。そこで大会に新たに「第X部会 日本漢詩文」を設置し、二、三年は本学会会員の発表に加えて、本学会外部の研究者を発表者、司会などに招聘して協力を仰いではいかがであろうか。その場合には、外部研究者に旅費・謝礼を提供する必要があるだろう。

また「第X部会　日本漢詩文」に続けて、哲学・思想、語学などの分野でも隣接分野「第Y部会、第Z部会」の新設を検討できよう。

これら新部会設置により隣接分野との研究交流を強化し、また隣接分野研究者の本学会への新規入会を促進する。

（3）大会における外国人訪問学者等の招聘発表および講演

現在、日本国内には常時、多くの中国学を専攻する高水準の外国人研究者が訪問学人などとして滞在しており、優秀な外国人若手研究者・院生も多く日本で学んでいる。新たに「第Y部会、世界の中国学研究の現在」を新設して、哲学・思想、文学、語学各一名に各30～40分（さらに討論20～30分）で、中国・香港・台湾・韓国・欧米など各地域での当該研究者の研究領域に関する研究状況を紹介していただいてはいかがであろうか。その場合には、旅費・謝礼を提供する必要があるだろう。

ただし新たに「第Y部会」を設置することなく、講演会をこれに充当することも検討に値するであろう。

（4）中国学関係学科受験者増加のための特定高校における広報活動

日本には江戸時代の藩校の漢学伝統を受け継ぐ名門高校が各地にあり、「藩校サミット」という交流組織ができているという。また中国語教育や中国・台湾への研修旅行などに力を入れている高校も多い。

このような高校を対象に本学会より講師を派遣し、啓蒙活動を行い、中哲、中文、中国語学科などへの進学を促進する。この場合、全国漢文教育学会と協力することも考えられよう。

以上の提言はすでに理事会に報告書として提出しまして、三月の理事会でご審議いただく予定です。会員のみなさまからもご意見を頂戴できれば幸いです。

［将来計画特別委員会］

委員長　堀池　信夫

○第1回委員会（2009年7月25日、於本郷学士会館）

出席者：堀池信夫、浅見洋二、大形徹、野間文史、松崎哲之（幹事）、牧角悦子（副理事長）

【審議事項】

（1）「東アジアの文化・古典」の教育・研究の将来に向けて（「提言」案）について

日本中国学会として中国学振興に向けての「提言」最終文案の検討がなされた。大地委員からは意見書、市來委員からはパブリックコメントの要旨、牧角副会長からは「日本文化の未来のために　漢字・漢文教育復権の提言」が提出され、前回の文案をもとに、5月の理事会からの指摘を中心にして検討が加えられた。

①本学会の利益擁護ではなく、日本の学問全体の立場に立つことを分かるようにする。

②政治的利用に結びつけられないような文言の工夫をする。

③日本中国学会の性格を端的に示す表現を入れる。

④「近隣諸国」や「近隣他者」等のことばの使い方に注意をはらう。

検討の結果、「漢字・漢文ならびに東アジア文化の教育研究に関する提言」として、「提言」最終文案が作成された。「提言」最終文案は別紙参照。

【報告事項等】

(1)委員の紹介等

堀池委員長より、各委員・幹事の紹介があった。また、オブザーバーとして牧角副理事長にご出席いただく旨の説明があった。

(2)その他

将来計画委員会の今後について、学会の公益法人化についての議論の可能性がある旨の説明が堀池委員長からなされた。

○第2回委員会

(2009年10月10日、文教大学3号館会議室4)

出席者：堀池信夫、浅見洋二、市來津由彦、大形徹、大地武雄、野間文史、三浦秀一、松崎哲之（幹事）

【審議事項】

(1)「漢字・漢文ならびに東アジア文化の教育・研究に関する提言(案)」について

堀池委員長から、標記「提言（案）」について、理事会および評議会での審議内容と、この「提言(案)」はおおむね了承されたことが報告された。また理事長指示のもとに、これを本日の総会で報告することが伝えられた。

しかし、この「提言（案）」には、次の点についてさらなる調整が必要とされることも指摘された。

①文言中の「共通のコミュニケーションツール」を漢字で表記すべきではないか。

②「記」Ⅱについては、Ⅰと同様に具体的綱目を入れるべきではないか。

また、「記」Ⅰの「国語科教員免許取得に必要な「漢文」1単位の2単位以上への増加」について、現行の大学の授業形態からして、「2単位以上」を「4単位以上」にすべきではないかとの意見が出された。議論の結果、「2単位」から「4単位」に変更するとし、明日の理事会の審議にかけることとした。

以上の点を含めて、全会員から11月中旬をめどに文章として意見を求め、次回の委員会でさらなる検討をすることになった。

(2)漢文検定等の計画について

堀池委員長から、理事会において、漢文検定実施に関して本委員会での検討が打診されていると報告された。斯文会で漢文検定を実施すること、立命館大学においてもそのような計画があること等が報告され、日本中国学会としてのこれらとの関与のあり方を考えるとともに、またそれにかかわる情報収集にも力を入れ、次回以降の委員会で検討することになった。

(3)その他

次回の委員会は年度内に実施する方向で調整するとされた。

[HP特別委員会]

委員長　渡邉　義浩

HP特別委員会からのお願いとご報告

1. 中国学関係学会・研究会情報、中国学関係採用情報への協力のお願い

日本中国学会のホームページを充実させるため、中国学関係の学会や研究会の情報を掲げる「中国学関係学会・研究会情報」という項目に加えて、中国学関係の採用情報を掲げる「中国学関係採用情報」という項目を新設しました。ともに、日本中国学会のメールアドレス（ssj3@wwwsoc.nii.ac.jp）までお寄せいただければ、ホームページに掲げますので、積極的にご利用ください。

2.「日本中国学会報CD」のHPでの公開

日本中国学会創立六十年記念事業の一環として作成した「日本中国学会報CD」をHPに掲げております。第一集から第二十集までは、誰でも閲覧できますが、第二十一集以降は、会員に限界して公開するためにパスワードを設定しております。パスワードは、hpronbun です。内容は、「日本中国学会報CD（第一集～第五十八集）」と同じですので、許諾をいただいた論文だけが公開されております。

日本中国学会　平成20年(2008)度　収支決算書

平成20年(2008)4月1日～平成21年(2009)3月31日

(単位：円)

	科目	予算	決算	摘要	差額
収入の部	1. 前年度繰越	¥10,458,096	¥10,458,096		¥0
	2. 会員会費	¥12,000,000	¥12,065,503		¥65,503
	3. 寄付金	¥1,000,000	¥1,003,500	うち写真代 ¥3,500	¥3,500
	4. 預金利息	¥3,000	¥11,100		¥8,100
	5. 著作権料分配金	¥0	¥34,000		¥34,000
	総計	¥23,461,096	¥23,572,199	(A)収入総計	¥111,103

	科目	予算	決算	摘要	差額
支出の部	1. 事務局総務費	¥3,280,000	¥3,168,548	(1)～(7)	¥111,452
	(1)印刷費	¥1,400,000	¥1,152,824	「便り」・封筒・投票用紙等	¥247,176
	(2)通信費	¥1,000,000	¥1,097,821	「便り」・投票用紙等	¥－97,821
	(3)交通費	¥70,000	¥72,940	事務局補佐交通費等	¥－2,940
	(4)消耗品費	¥200,000	¥363,555	うち事務局PC買換¥226,100	¥－163,555
	(5)庶務処理費	¥100,000	¥0		¥100,000
	(6)雑費	¥300,000	¥271,408	うち振込手数料¥145,380	¥28,592
	(7)業務委託料	¥210,000	¥210,000	斯文会	¥0
	2. 事務局人件費	¥1,860,000	¥1,526,000	(1)(2)	¥334,000
	(1)幹事手当	¥360,000	¥360,000		¥0
	(2)謝金	¥1,500,000	¥1,166,000	事務局補佐謝金等	¥334,000
	3. 事務局会議費	¥400,000	¥862,960	(1)(2)	¥－462,960
	(1)会議費	¥100,000	¥122,170		¥－22,170
	(2)役員旅費	¥300,000	¥740,790	年度末引継理事会開催	¥－440,790
	4. 事業費	¥9,700,000	¥8,763,831	(1)(2)	¥936,187
	(1)学会報等刊行費	¥5,500,000	¥4,842,237		¥667,763
	イ. 印刷費	¥3,000,000	¥2,532,232	学会報及び名簿	¥467,768
	ロ. 編集費	¥1,600,000	¥1,600,000		¥0
	ハ. 翻訳謝金	¥300,000	¥273,000	英文要旨作成	¥27,000
	ニ. 発送費	¥600,000	¥437,005	モリモト印刷業務委託等	¥162,995
	(2)学術大会運営費	¥1,200,000	¥1,200,000		¥0
	(3)60年記念事業費	¥3,000,000	¥2,721,567		¥278,424

	科目	予算	決算	摘要	差額
支出の部	5. 各種大会委員運営費	¥2,235,000	¥2,228,388	(1)～(7)	¥6,612
	(1)大会委員会	¥15,000	¥525		¥14,475
	イ. 通信費	¥5,000	¥0		¥5,000
	ロ. 会議・旅費	¥0	¥0		¥0
	ハ. 謝金	¥5,000	¥0		¥5,000
	ニ. 消耗品・雑費	¥5,000	¥525		¥4,475
	(2)論文審査委員会	¥630,000	¥591,212		¥38,788
	イ. 通信費	¥140,000	¥176,830		¥－36,830
	ロ. 会議・旅費	¥400,000	¥340,034		¥59,966
	ハ. 謝金	¥60,000	¥60,000		¥0
	ニ. 消耗品・雑費	¥30,000	¥14,348		¥15,652
	(3)出版委員会	¥400,000	¥435,247		¥－35,247
	イ. 通信費	¥30,000	¥12,550		¥17,450
	ロ. 会議・旅費	¥250,000	¥310,640		¥－60,640
	ハ. 謝金	¥30,000	¥30,000		¥0
	ニ. 学会便り編集費	¥80,000	¥80,000		¥0
	ホ. 消耗品・雑費	¥10,000	¥2,057		¥7,943
	(4)選挙管理委員会	¥240,000	¥336,908		¥－96,908
	イ. 通信費	¥10,000	¥12,920		¥－2,920
	ロ. 会議・旅費	¥150,000	¥270,390		¥－120,390
	ハ. 謝金	¥60,000	¥50,000		¥10,000
	ニ. 消耗品・雑費	¥20,000	¥3,598		¥16,402
	(5)研究推進・国際交流委員会	¥130,000	¥0		¥130,000
	イ. 通信費	¥5,000	¥0		¥5,000
	ロ. 会議・旅費	¥100,000	¥0		¥100,000
	ハ. 謝金	¥20,000	¥0		¥20,000
	ニ. 消耗品・雑費	¥5,000	¥0		¥5,000
	(6)将来計画特別委員会	¥240,000	¥286,811		¥－46,811
	イ. 通信費	¥5,000	¥270		¥4,730
	ロ. 会議・旅費	¥200,000	¥266,481		¥－66,481
	ハ. 謝金	¥30,000	¥20,000		¥10,000
	ニ. 消耗品・雑費	¥5,000	¥60		¥4,940
	(7)ホームページ特別委員会	¥580,000	¥577,685		¥2,315
	イ. 通信費	¥10,000	¥0		¥10,000
	ロ. 会議・旅費	¥50,000	¥63,100		¥－13,100
	ハ. 謝金	¥20,000	¥20,000		¥0
	ニ. ホームページ管理費	¥500,000	¥494,585		¥5,415
	1～5	¥17,475,000	¥16,549,709		¥925,291
	予備費	¥5,986,096	¥0	支出費目としては計上しない	
	合計	¥23,461,096	¥16,549,709	(B)支出合計	¥6,911,387
	次年度繰越金	－	¥7,022,490	(A)収入総計－(B)支出合計	
	総計	¥23,461,096	¥23,572,199		¥－111,103

学会基金

収入の部	基本金	¥4,300,000
	前年度繰越金	¥939,196
	預金利息	¥9,037
	信託収益金	¥2,588
	合計	¥950,821

支出の部	基本金	¥4,300,000
	日本中国学会費	¥80,000
	次年度繰越金	¥870,821
	合計	¥950,821

備考(基本金内訳)	奥野基金	¥500,000
	佐藤基金	¥200,000
	池田基金	¥300,000
	伊藤基金	¥300,000
	積立基金	¥3,000,000

上記の通り、相違ないことを認めます。　平成21年5月13日

日本中国学会監事　安藤信廣　林克　大木康

日本中国学会　平成21年(2009)度　予算書

平成21年(2009)4月1日～平成22年(2010)3月31日

(単位：円)

	科目	予算	摘要
収入の部	1. 前年度繰越	¥7,022,490	
	2. 会員会費	¥12,000,000	
	3. 寄付金	¥1,000,000	
	4. 預金利息	¥3,000	
	5. 著作権料分配金	¥0	
	合計	¥20,025,490	

	科目	予算	摘要
支出の部	1. 事務局総務費	¥2,730,000	(1)～(7)
	(1)印刷費	¥1,250,000	「便り」・封筒印刷を含む
	(2)通信費	¥600,000	「便り」発送を含む
	(3)交通費	¥70,000	
	(4)消耗品費	¥200,000	
	(5)庶務処理費	¥100,000	
	(6)雑費	¥300,000	
	(7)業務委託料	¥210,000	振込手数料および対外費を含む
	2. 事務局人件費	¥1,860,000	(1)(2)
	(1)幹事手当	¥360,000	
	(2)謝金	¥1,500,000	事務局補佐謝金を含む
	3. 事務局会議費	¥400,000	(1)(2)
	(1)会議費	¥100,000	
	(2)役員旅費	¥300,000	五月理事会分
	4. 事業費	¥6,400,000	(1)(2)
	(1)学会報等刊行費	¥5,200,000	イ～ニ
	イ. 印刷費	¥2,800,000	学会報及び名簿
	ロ. 編集費	¥1,600,000	
	ハ. 翻訳謝金	¥300,000	英文要旨作成
	ニ. 発送費	¥500,000	
	(2)学術大会運営費	¥1,200,000	

	科目	予算	摘要
支出の部	5. 各種大会委員運営費	¥2,070,000	(1)～(7)
	(1)大会委員会	¥55,000	
	イ. 通信費	¥5,000	
	ロ. 会議・旅費	¥40,000	
	ハ. 謝金	¥5,000	
	ニ. 消耗品・雑費	¥5,000	
	(2)論文審査委員会	¥610,000	
	イ. 通信費	¥180,000	
	ロ. 会議・旅費	¥350,000	
	ハ. 謝金	¥60,000	
	ニ. 消耗品・雑費	¥20,000	
	(3)出版委員会	¥400,000	
	イ. 通信費	¥30,000	
	ロ. 会議・旅費	¥250,000	
	ハ. 謝金	¥30,000	
	ニ. 学会便り編集費	¥80,000	
	ホ. 消耗品・雑費	¥10,000	
	(4)選挙管理委員会	¥65,000	非改選年度
	イ. 通信費	¥5,000	
	ロ. 会議・旅費	¥30,000	
	ハ. 謝金	¥20,000	
	ニ. 消耗品・雑費	¥10,000	
	(5)研究推進・国際交流委員会	¥70,000	
	イ. 通信費	¥5,000	
	ロ. 会議・旅費	¥40,000	
	ハ. 謝金	¥20,000	
	ニ. 消耗品・雑費	¥5,000	
	(6)将来計画特別委員会	¥290,000	
	イ. 通信費	¥5,000	
	ロ. 会議・旅費	¥250,000	
	ハ. 謝金	¥30,000	
	ニ. 消耗品・雑費	¥5,000	
	(7)ホームページ特別委員会	¥580,000	
	イ. 通信費	¥5,000	
	ロ. 会議・旅費	¥55,000	
	ハ. 謝金	¥20,000	
	ニ. ホームページ管理費	¥500,000	
	1～5	¥13,460,000	
	予備費	¥6,565,490	
	合計	¥20,025,490	

学会基金

収入の部	基本金	¥4,300,000
	前年度繰越金	¥870,821
	預金利息	¥6,000
	信託収益金	¥2,000
	合計	¥878,821

支出の部	基本金	¥4,300,000
	日本中国学会費	¥160,000
	次年度繰越金	¥718,821
	合計	¥878,821

備考(基本金内訳)	奥野基金	¥500,000
	佐藤基金	¥200,000
	池田基金	¥300,000
	伊藤基金	¥300,000
	積立基金	¥3,000,000

平成21年度会員動向

●会員動向（平成21年10月23日現在）
総会員数1,876名、準会員57機関、賛助会員9社

●物故会員（『学会便り』本年度第1号発行以後、10月23日現在）

関東地区　大川　忠三
　　澤田多喜男
　　原田　正己
関西地区　本田　　濟
　　（敬称略）

●退会会員

○退会申出会員（第1回、第3回理事会承認分）　22名

阿部　龍生	安東　俊六	伊井健一郎
久富木成大	河野　匡志	塩見　邦彦
城谷　武男	高崎真理子	高橋みつる
高畑　常信	田部井文雄	栃尾　　武
中田　伸一	蜂屋　邦夫	波戸岡　旭
藤井　　明	藤井栄三郎	増山　賢治
松崎　治之	宮田　末子	山崎　眞也
若槻　俊秀		

○4年会費未納による退会会員　36名

●住所不明会員　41名

安部　史絵	韋　海英	王　京鈺
大西　　紀	尾形　幸子	小川　貴宏
小野美由紀	呉　相武	高　倩藝
黄　名月	古城　広恵	後藤　淳一
蔡　麗玲	材木谷　敦	島津　京淳
志村　　治	鈴木　康予	関　浩志
高市　裕子	鷹橋　明久	田宮　昌子
田村　　将	暢　素梅	趙　立男
中山　　歩	中山　　至	檜垣　馨二
樋口　　勝	福田　　忍	朴　在慶
槙　高志	宮内　四郎	村上　嘉英
山崎みどり	山島めぐみ	好並　　晶
藍　惠子	劉　岳兵	劉　柏林
林　敏潔	林　　祁	

※上記会員の連絡先をご存じの方は、お手数ですが事務局までご一報ください（メールアドレス：ssj3@wwwsoc.nii.ac.jp）。

平成21年度新入会員一覧

10月9日開催の評議員会で入会が承認されたのは、以下の通りです。

●通常会員　9名

青木　洋司	九州地区	九州大学（院）
大野　裕司	北海道地区	北海道大学（院）
高　　媛	中部地区	名古屋大学（院）
岸田　憲也	九州地区	九州大学（院）
曹　　峰	国外	清華大学
西山　尚志	国外	山東大学
白　蓮杰	関東地区	お茶の水女子大学（院）
水野　　卓	関東地区	専修大学（非）
山内　良太	関東地区	大東文化大学（院）

なお、以下の方々については5月及び6月に開催された持ち回り評議員会において入会が承認され、すでに今年度の名簿に掲載されています。

●通常会員　12名

梅川　純代	王　暁白	小笠原　淳
蓋　暁星	菅野　恵美	渋井　君也
徐　暁紅	張　丹鳳	豊田　周子
裴　　亮	松井真希子	吉井　涼子

平成21年度　日本学術振興会科学研究費補助金採択状況一覧

（単位：千円）

特別推進研究

●清朝宮廷演劇文化の研究　24,400
磯部　彰（東北大学）

特定領域研究

●東アジアにおける死と生の景観　5,600
薮　敏裕（岩手大学）

●日中通俗文芸の体系化を目的とした先駆的研究―小説・芸能を中心論題として　3,100
勝山　稔（東北大学）

●東アジアの海域交流と日本伝統文化の形成―寧波を焦点とする学際的創生―：総括班　39,500
小島　毅（東京大学）

●歴史書編纂と王権理論に見る東アジア３国の比較　9,700
小島　毅（東京大学）

●朝鮮思想と中国・ヨーロッパ―東アジア海域交流のなかで　4,800
川原秀城（東京大学）

●宋元明における仏教道教交渉と日本宗教・思想　5,900
横手　裕（東京大学）

●宋代浙江の茶文化の研究―茶の湯文化の源流として　4,600
高橋忠彦（東京学芸大学）

●寧波における知の営みとその伝統―学派・宗族・トポフィリア―　4,500
早坂俊廣（信州大学）

●五山文学における宋代詩文の受容と展開―詩文集の注釈と詩話を中心に―　6,300
浅見洋二（大阪大学）

●儒学テキストを通しての近世的思考様式の形成―日中における対照的研究―　6,200
中村春作（広島大学）

●散楽の源流と中国の諸演劇・芸能・民間儀礼に見られるその影響に関する研究　5,400
加藤　徹（明治大学）

●日記および文集に見える宋元時代の東アジア交流と両浙地域の社会、経済　5,800
遠藤隆俊（高知大学）

●日本における中国古典文学の伝播とその展開に関する研究　6,800
静永　健（九州大学）

●中国東南部の学術と図書の収集・出版・流通　4,300
高津　孝（鹿児島大学）

●「東アジアの海域交流と日本伝統文化の形成」調整班A01：文献資料研究部門　2,300
平田茂樹（大阪市立大学）

●前近代中国の中央・地方・海外を結ぶ官僚システム　8,500
平田茂樹（大阪市立大学）

●中国思想文献の近世日本社会への伝来とその流通―新儒教と医学思想の文献を中心として　6,900
恩田裕正（東海大学）

●中国科挙制度からみた寧波士人社会の形成と展開　4,700
近藤一成（早稲田大学）

●浙江・江蘇地域の道教・民俗信仰に関する廟宇・祭神・儀礼調査　6,200
二階堂善弘（関西大学）

新学術領域研究

●東アジアの華人文化圏諸都市におけるサブカルチャー受容と若者の感性の変化　1,700
千野拓政（早稲田大学）

若手研究(B)　新規

哲学

●後漢経学の基礎的研究　1,400
井ノ口哲也（東京学芸大学）

●東アジアにおける儒教の基礎的研究　1,100
城山陽宣（関西大学）

●モンゴルにおける宣教と聖書翻訳の宗教社会学的研究　1,600
滝澤克彦（東北大学）

●神話にみられるヒトと自然の相互関係―東アジア基層文化の宗教民族学的研究―　1,200
山田仁史（東北大学）

●清初以降の清代詩経学における思想的連続性に関する研究　600
江尻徹誠（北海道大学）

芸術学

●中華民国期上海における地方劇の進出と定着に関する研究　1,100
森平崇文（早稲田大学）

●中国における音楽興行の空間演出に関する研究　1,700
渡邊哲意（宝塚造形芸術大学）

文学

●日中戦争期「魯迅」受容の多角的研究―小田嶽夫・武内好・太宰治を中心に　700
松本和也（信州大学）

●宋代詩文中の「三国志物語」を手がかりとした『三国志演義』形成過程の研究　400
角谷　聰（新潟大学）

●日本中世禅林における柳宗元受容の研究　900
太田　亨（愛媛大学）

●東アジアにおける白居易受容の諸相と日中独自文化の形成に関する研究 1,100
陳　　翀（九州大学）

●唐詩解釈に果たした唐詩画の役割とその意義に関する研究 1,300
有木大輔（九州大学）

●元・明両代に登場した類書・字書の系統に関する研究 1,100
大岩本幸次（大阪市立大学）

●北宋中期における文人ネットワークと酬唱詩の研究 1,000
緑川英樹（神戸市外国語大学）

●学際的アプローチによる中国―欧米間映画関係史構築に関する研究 1,300
菅原慶乃（関西大学）

言語学
●漢語文法史の視点による早期漢訳仏典言語研究 800
松江　崇（北海道大学）

●現代中国語における可能表現研究―領属物としての能力とその発現 600
勝川裕子（名古屋大学）

●ベトナム華人社会における言語生活の調査研究 700
三木夏華（鹿児島大学）

●近代の欧人基督教宣教師の訳著にみる中国語研究と異文化翻訳について 1,400
塩山正純（愛知大学）

史学
●室町幕府の外交儀礼と唐物文化に関する基礎的研究 1,000
橋本　雄（北海道大学）

●唐五代期における実用典籍の読者層の研究―中国西北出土古文献を中心に 1,100
岩本篤志（新潟大学）

●中国北朝隋唐期における国家と地方社会に対する仏教信仰及び教団の政治的役割の研究 1,400
高瀬奈津子（札幌大学）

文化人類学
●中国貴州省布依（プイ）族伝統文書「摩経」の収集・保存・研究 1,200
余　志清（清泉女子大学）

法学
●近世前期上方都市の社会構造と民事裁判―日中文芸比較を手掛りとして 1,100
桑原朝子（北海道大学）

社会学
●『儒教と道教』の理解社会学的解釈によるヴェーバーの東アジア論の再構成 800
荒川敏彦（東京外国語大学）

心理学
●漢字認知における構成部品の意味的・音韻的情報の活性化の検討 500
藤田知加子（浜松医科大学）

若手研究(B)　継続

生活科学
●明清時代における生活空間の研究―家具とその使用を中心として 900
高井たかね（京都大学）

哲学
●東アジアの宗族におけるキリスト教思想の影響―儒教規範に基づく家族制を中心に― 500
安部　力（北九州工業高等専門学校）

●近世中国におけるムスリムの人生儀礼研究 900
佐藤　実（関西大学）

●版本と異なる日本古写経中の漢訳仏典研究―『五王経』『普賢菩薩行願讃』を中心に― 600
林寺正俊（国際仏教学大学院大学）

●東アジア仏教論理学史研究のための逸文データベースの構築 1,200
師　茂樹（花園大学）

●敦煌唐代前半期壁画の総合的研究 700
西林孝浩（立命館大学）

文学
●江戸時代中期における漢詩文の日本化の様相―日本人は漢詩文で自己表現し得たか― 500
中島貴奈（長崎大学）

●一九四〇年代文学に見る「中国近代」の隘路 100
杉村安幾子（金沢大学）

●東方文化事業と中国人留学生に関する研究―陶晶孫を中心として 300
中村みどり（早稲田大学）

●東西資料によるモンゴル時代の政治・文化交流の解析と実証 1,000
宮　紀子（京都大学）

●東アジア圏における中国古典小説の現代的意義と価値について 500
上原徳子（宮崎大学）

●中華民国期京劇の舞台装置に関する研究 900
田村容子（福井大学）

●中華人民共和国建国以降の映画作品と伝統演劇との関係性についての研究 700
阿部範之（同志社大学）

●郁達夫における大正文学受容の比較文学研究 600
大東和重（近畿大学）

言語学
●広東語の談話モダリティの研究　意味機能と音声の相関に着目して 600
飯田真紀（北海道大学）

●中国西南部の同系多言語社会における地域特徴形成の調査研究 700
白井聡子（名古屋工業大学）

●19世紀中国における翻訳語の研究 900
千葉謙悟（早稲田大学）

●甲骨文字における殷代の聖職者に関する総合的研究 600
陳　　捷（立命館大学）

●倭玉篇を中心とした漢和辞書の中世から近世への変移 600
鈴木功眞（日本大学）

●英語・日本語・中国語における寄生空所を含む文の派生に関する理論的研究 300
小町将之（三重大学）

●中国語を母語とする日本語学習者による長母音の産出傾向と母音の範疇知覚化 700
栗原通世（国士舘大学）

●認知的観点による日本人中国語学習者の「結果補語」表現の習得研究　500
姚　艶玲（東海大学）

史学
●東アジアにおける儀礼文化の比較歴史学的研究　700
稲田奈津子（東京大学）

●中国近世における人事制度とその運用理念に関する基礎的研究―明清時代を中心として―　800
大野晃嗣（東北大学）

●「周代宗法制」の成立に関する研究　600
小寺　敦（東京大学）

●文献史料および出土文字史料よりみた漢魏交替期の国家支配と地域社会　500
阿部幸信（中央大学）

●戦国文字と記録媒体に関する基礎的研究―戦国史像の再構築―　500
下田　誠（学習院大学）

●古都・長安の"再"発見―足立喜六著『長安史蹟の研究』を中心に　800
村松弘一（学習院大学）

●「卜筮祭祷簡」による戦国楚の宗教文化の研究　700
森　和（早稲田大学）

●中国北朝の諸民族と文化の融合に関する考古学的研究　600
向井佑介（京都大学）

基盤研究(S)継続

史学
●東アジアにおける儀礼と刑罰―礼的秩序と法的秩序の総合的研究　13,800
冨谷　至（京都大学）

基盤研究(A)　一般・新規

哲学
●東アジアにおける伝統教養の形成と展開に関する学際的研究：書院・私塾教育を中心に　7,000
吾妻重二（関西大学）

史学
●東アジア木簡学の確立　4,700
角谷常子（奈良大学）

基盤研究(A)　一般・継続

哲学
●『道蔵輯要』と明清時代の宗教文化　9,800
麦谷邦夫（京都大学）

文学
●五山版を中心とする中世刊本の研究―中世出版史の再構築に向けて―　6,400
落合博志（国文学研究資料館）

史学
●東国地域及び東アジア諸国における前近代文書等の形態・料紙に関する基礎的研究　4,200
山本隆志（筑波大学）

●出土資料群のデータベース化とそれを用いた中国古代史上の基層社会に関する多面的分析　8,000
関尾史郎（新潟大学）

基盤研究(A)　海外学術調査・継続

史学
●南北朝～隋代における石刻造像銘の調査及びその地域史的宗教環境の研究　4,800
佐藤智水（龍谷大学）

●河姆渡文化研究の再構築―余姚田螺山遺跡の学際的総合調査―　6,700
中村慎一（金沢大学）

基盤研究(B)　一般・新規

哲学
●戦国楚簡と先秦思想史に関する総合的研究　2,600
湯浅邦弘（大阪大学）

●中国道教における山岳信仰と宗教施設のネットワークに関する総合的調査と研究　2,400
土屋昌明（専修大学）

●東アジアにおける仏教と神信仰との融合から見た日本古代中世の神仏習合に関する研究　3,100
吉田一彦（名古屋市立大学）

●世紀交代期中国の文化転形に関する言説分析的研究　4,700
砂山幸雄（愛知大学）

●礼拝空間における儒教美術の総合的研究　4,000
守屋正彦（筑波大学）

●シノワズリの中の日本　17～19世紀の西洋における日本文化受容と中国　3,600
日高　薫（国立歴史民俗博物館）

●隋唐時代の仏舎利信仰と荘厳に関する総合的調査研究　4,900
加島　勝（東京国立博物館）

文学
●東アジアにおける古典偽書の比較文化的研究　2,600
千本英史（奈良女子大学）

●19世紀以前の日本と東アジアの〈予言文学〉をめぐる総合的比較研究　4,200
小峯和明（立教大学）

●東アジアにおける魯迅「阿Q」像の系譜　1,800
藤井省三（東京大学）

●中国古代戦国期における楚文化の学際的研究―中原との関わりに着目して―　2,000
大野圭介（富山大学）

●ロシアに所蔵される敦煌吐魯番等発見漢文文献の研究　3,900
高田時雄（京都大学）

●宋代総集の流伝と文学史的意義に関する実証的研究　1,700
野村鮎子（奈良女子大学）

言語学
●学習状況の分析に基づくe-Learning活用型中国語教育の構築　2,900
湯山トミ子（成蹊大学）

史学
●日唐宋律令法の比較研究と『新唐令拾遺』の編纂　4,300
大津　透（東京大学）

●ヨーロッパ人の文献史料にもとづく清朝前期の政治と社会に関する総合的研究　2,300
松浦　茂（京都大学）

●天聖令と両『唐書』食貨志による唐宋変革期の社会経済史的研究　4,600
渡辺信一郎（京都府立大学）

基盤研究(B)　海外学術調査・新規

史学

●近代中国における回民コミュニティの経済的・文化的活動　2,000
黒岩　高（武蔵大学）

●紀年銘中原青銅器の再検討による中国北方青銅器文化研究の再構築　2,300
小林青樹（國學院大學栃木短期大学）

文化人類学

●中国・モン川大地震後のチャン族と「羌文化」　2,700
松岡正子（愛知大学）

基盤研究(B)　一般・継続

情報学

●和漢古典学のオントロジモデルの応用　4,200
相田　満（国文学研究資料館）

科学社会学・科学技術史

●中国古代技術書の研究－王禎『農書』を中心として　3,500
田中　淡（京都大学）

地域研究

●近現代中国におけるリベラリズム思想の受容と展開　3,300
村田雄二郎（東京大学）

ジェンダー

●台湾女性史とジェンダー主流化戦略に関する基礎的研究　2,900
成田静香（関西学院大学）

哲学

●科挙に関する文献学的総合研究　2,000
佐藤錬太郎（北海道大学）

●思想史的社会史的史料としての科挙答案に関する基礎的研究　2,100
三浦秀一（東北大学）

●日本中世期の経書学に関する基礎的研究　2,100
水上雅晴（北海道大学）

●中国イスラム哲学形成の研究　2,300
堀池信夫（筑波大学）

●新出土資料を通してみた古代東アジア世界の諸相－漢字文化圏の中の地域性－　4,700
谷中信一（日本女子大学）

●中国印度宗教史とくに仏教史における書物の流通伝播と人物移動の地域特性　2,900
船山　徹（京都大学）

●ポタラ宮所蔵スティラマティの倶舎論注釈書『真実義』の新出梵文写本研究　3,000
小谷信千代（大谷大学）

●旅順博物館所蔵非漢字資料に関する総合的研究　3,600
三谷真澄（龍谷大学）

●「供養の文化」の比較研究をとおして見る「死」の表象の形成過程とその現代的変容　3,400
中村生雄（学習院大学）

●東アジアにおける文明の衝突と「天」の観念の変容　4,200
井上厚史（島根県立大学）

●仏教東漸および中国思想の受容から見た聖徳太子信仰の成立と展開に関する多角的研究　6,500
大山誠一（中部大学）

●東アジアの書道史における料紙と書風に関する基礎的研究　5,100
島谷弘幸（東京国立博物館）

文学

●和漢聯句の研究　2,800
大谷雅夫（京都大学）

●日本近世期における中国白話小説受容についての基礎研究　500
笹倉一広（一橋大学）

●戦時上海の文芸文化と邦字新聞「大陸新報」に関する多角的研究　3,800
大橋毅彦（関西学院大学）

●戦争をめぐる表現と表象－日本近代文学・日本映画に関する中仏との比較研究　3,300
中山昭彦（学習院大学）

●日本国外に現存する日本漢籍の総合的研究　3,100
佐藤道生（慶應義塾大学）

●和刻本漢籍再評価のための綜合的研究—底本解明を目的として—　3,300
山崎　誠（国文学研究資料館）

●南北朝楽府の多角的研究　3,200
佐藤大志（広島大学）

●文化大革命の文化史的再考　1,700
佐治俊彦（和光大学）

●東アジア（日本・中国・韓国）における歌謡の比較研究　4,000
真鍋昌弘（関西外国語大学）

●建仁寺両足院に所蔵される五山文学関係典籍類の調査研究　3,300
赤尾栄慶（京都国立博物館）

●近代東アジアにおける漢文体とキリスト教—『天路歴程』を中心に　2,400
斎藤希史（東京大学）

言語学

●古チベット語ユニオンデータベースの構築と解析—言語接触を中心とする多層構造の解明　2,600
武内紹人（神戸市外国語大学）

●中国語の構文及び文法範疇形成の歴史的変容と汎時的普遍性—中国語歴史文法の再構築—　2,800
木村英樹（東京大学）

●中国語とその周辺言語におけるダイクシス　3,400
林　徹（東京大学）

●中国語と日本語の対照に基づく事象表現の総合的研究　1,800
沈　力（同志社大学）

●東アジア角筆文献の発掘とその交流の調査研究—醍醐寺蔵宋版一切経の調査を主に—　4,300
小林芳規（広島大学）

史学

●東アジアにおける戦争・植民地記憶の保存と表象に関する国際的総合研究　3,200
君塚仁彦（東京学芸大学）

●前近代東アジアにおける文書とその伝来に関する比較史的研究　3,600
坂上康俊（九州大学）

●近現代中国江南の総合的研究—近100年間の人材的政治経済的発展基盤 1,600
高田幸男（明治大学）

●植民地期東アジア民衆諸宗教の伝播と交流～情報メディアの分析を中心に 3,900
武内房司（学習院大学）

●宋代社会経済史語彙解釈のデータベース化 2,700
斯波義信（財団法人東洋文庫）

法学
●中国文書行政形成過程の研究 2,200
陶安あんど（東京外国語大学）

社会学
●中国内漢族・モンゴル族・朝鮮族の言語文化変容に関する社会言語学的研究 900
李　　守（昭和女子大学）

基盤研究(B)　海外学術調査・継続

哲学
●北京・天津を中心とした華北の廟会と祭祀組織「香会」の実態研究 1,500
櫻井龍彦（名古屋大学）

●アメリカ収蔵「書跡」の基礎データ収集と整理のための調査研究 2,000
河内利治（大東文化大学）

文学
●激動する東アジアと琉球漢詩文～知識人の苦悩と思想～ 3,200
上里賢一（琉球大学）

言語学
●湘南土話の総合的研究 2,800
吉川雅之（東京大学）

●国際的視点から見た漢字文化圏における漢文訓読についての実証的研究 3,800
小助川貞次（富山大学）

●漢文典籍の国際交流に関する実証的研究 3,800
石塚晴通（北海道大学）

史学
●中国古医籍が日・韓・越の伝統医学形成史に与えた影響の書誌学的研究 1,200
真柳　誠（茨城大学）

●故宮博物院に収蔵される甲骨文の来源踏査—未刊本『甲骨刻辞』の解読を通して— 1,000
東　賢司（愛媛大学）

●中国新疆のウルムチ・トゥルファン両博物館所蔵非漢文古文献の研究 2,900
梅村　坦（中央大学）

●中国の初期仏教寺院とその源流にかんする考古学的研究 3,100
岡村秀典（京都大学）

社会学
●中国における文化政策とポピュラー文化の変容 1,700
石井健一（筑波大学）

基盤研究(C)　一般・新規

情報学
●電子化された『道法会元』の計量的分析 2,100
松本浩一（筑波大学）

哲学
●西洋哲学における宋明理学の受容と展開 200
井川義次（筑波大学）

●中国占術理論の形成 1,300
武田時昌（京都大学）

●五経正義の発展的研究 1,100
野間文史（広島大学）

●「朱子学」の誕生—南宋後期における士大夫思想展開の発展的研究— 800
市來津由彦（広島大学）

●『大戴礼記』に残存する『孔子三朝記』についての基礎的研究 500
末永高康（鹿児島大学）

●術数書の基礎的文献学的研究 1,300
三浦国雄（大東文化大学）

●王畿の良知心学と明末の講学活動に関する基礎的研究 1,200
小路口聡（東洋大学）

●トルファン出土漢語文書（主として漢訳仏典）の研究 1,800
西脇常記（同志社大学）

●密教流伝史研究－インド・チベット密教翻訳僧データベースの構築－ 800
桜井宗信（東北大学）

●チベット仏教における論理学の研究 1,400
白館戒雲（大谷大学）

●近代日中キリスト教関係史研究 1,300
渡辺祐子（明治学院大学）

●『集神州三宝感通録』の美術史料論的研究 1,300
肥田路美（早稲田大学）

芸術学
●中国第６世代映画・「新記録映画」に関する総合的研究 1,200
応　　雄（北海道大学）

●東アジアにおける語り物音楽の伝承並びに声の技法に関する比較分析研究 1,100
垣内幸夫（京都教育大学）

文学
●唐物から見た日本文化史の総合的研究—上代から近世まで— 1,200
河添房江（東京学芸大学）

●奈良・平安初期漢文書簡に見る敦煌書儀・尺牘表現受容の史的展開 1,500
西　一夫（信州大学）

●高度成長による文学と文化の変容—中国との比較を視座として— 1,100
瀧田　浩（二松学舎大学）

●古活字版の展開を追う—慶長・元和・寛永— 1,000
小秋元段（法政大学）

●中国における日本漢詩の受容 1,000
蔡　　毅（南山大学）

●中国笑話集と日本文学・日本語との関連に関する研究 800
島田大助（豊橋創造大学）

●中国における人化異類変身譚の研究 500
岡田充博（横浜国立大学）

●文簡本を中心とした『水滸伝』の研究 900
氏岡真士（信州大学）

●近代文学形成期における中国古典の連続性の研究 700
加藤國安（名古屋大学）

●中国バレエ史研究：革命バレエの成立と終焉およびその継承まで 700
星野幸代（名古屋大学）

●近代中国の自画像 800
遊佐　徹（岡山大学）

●台湾現代詩のモダニズムとポストモダニズム 500
三木直大（広島大学）

●明治の東京を描いた中国詩の集成 200
小川恒男（広島大学）

●オーラル・ヴィジュアル叙述における戦時上海(1937－1949)の話劇・映画 1,100
邵　迎建（徳島大学）

●白居易を中心とする中唐「風流」文学の展開に関する研究 800
諸田龍美（愛媛大学）

●「満洲国」の新聞の文芸欄に関する基礎的研究 1,300
大久保明男（首都大学東京）

●「四大奇書」の研究 600
小松　謙（京都府立大学）

●白朗研究 500
平石淑子（大正大学）

●アジアにおける中国現代文学受容の基礎的研究 700
山口　守（日本大学）

●南戯「劉希必金釵記」の文字学・方言学などによる総合的研究 500
福満正博（明治大学）

●魯迅をめぐる日本人－新資料の発掘－に関する研究 1,700
久保卓哉（福山大学）

言語学

●台湾中央研究院所蔵イ（ロロ）文字文献の分類・解読・解題 1,200
清水　享（東京外国語大学）

●消滅の危機に瀕した中国甘粛省、青海省のモンゴル系孤立諸言語にかんする調査研究 800
佐藤暢治（広島大学）

●びん語びん東区方言群祖語の再構 1,000
秋谷裕幸（愛媛大学）

●現代中国における満洲族・錫伯族の言語と民族意識に関する実証的研究 900
山崎雅人（大阪市立大学）

●台湾客家語海陸方言の記述的研究 700
遠藤雅裕（中央大学）

●漢語アクセントの解明と資料の発掘 1,800
上野和昭（早稲田大学）

●現代における漢語表記の実態とその背景に関する調査研究 1,100
笹原宏之（早稲田大学）

●東アジアの漢字圏における漢字使用の諸相 1,700
毛利正守（武庫川女子大学）

●中国語母語話者のための漢字音教材開発－入声音を含む漢語を中心に－ 300
黒沢晶子（山形大学）

●三言語（日本語・韓国語・中国語）同時学習支援に関する研究 900
長友和彦（宮崎大学）

●機能シラバス作成のための発話機能の日中対照研究 500
山岡政紀（創価大学）

●誤用例の文脈分析に依拠した上級作文教材―日中両国語パラレルコーパスの活用 1,400
大滝幸子（金沢大学）

史学

●東アジア古代社会における音楽文化の比較社会文化史的研究 800
荻美津夫（新潟大学）

●随筆「甲子夜話」全文検索システムの構築と公開に関する研究 1,600
岩崎義則（九州大学）

●中国雲南地方の非漢民族における「歴史記述」の伝統 1,100
林謙一郎（名古屋大学）

●明版書誌の解明を通じた明代出版史研究 800
井上　進（名古屋大学）

●経済中心地論にもとづく唐宋変革論の再検討 500
青木　敦（大阪大学）

●宋―明期の江南における小経営発展と里甲制体制下の階層構成に関する研究 1,800
伊藤正彦（熊本大学）

●桑原隲蔵『中等東洋史』の中国語訳本に関する調査とテキストの比較研究 900
黄　東蘭（愛知県立大学）

●魏晋南北朝における地域意識と地域文化に関する総合的研究 1,400
中村圭爾（大阪市立大学）

●19世紀中葉の中国長江流域における社会変容と太平天国 1,000
菊池秀明（国際基督教大学）

●18－20世紀における北京の社会経済空間と市民の日常生活に関する研究 900
熊　遠報（早稲田大学）

人文地理学

●東亜同文書院生の「大旅行」記録による20世紀前半期満州の地域構造研究 1,300
藤田佳久（愛知大学）

基盤研究(C)　一般・継続

科学教育・教育工学

●中国語を学習する日本語話者向けの発音訓練のシステムの開発 500
星野朱美（富山商船高等専門学校）

●中国語声調の発声の自習のためのインタネット利用ＣＡＩシステム 700
比企静雄（早稲田大学）

科学社会学・科学技術史

●漢訳西洋暦算書の基礎調査と近世国学者への影響に関する研究 600
小林龍彦（前橋工科大学）

●『九章算術』の『算数書』との比較および数学史における位置付けの検討 900
田村　誠（大阪産業大学）

地域研究

●四川省チベット地区における中国共産党の宗教政策及び統一戦線活動に関する研究 500
川田　進（大阪工業大学）

ジェンダー

●近代中国における漫画の形成と漫画表象のジェンダー観点からの研究 800
坂元ひろ子（一橋大学）

哲学

●日本儒教に関する倫理学・倫理思想史的研究―近代化論と比較思想史的研究の統合 1,000
高島元洋（お茶の水女子大学）

●「自然」と翻訳される諸概念間の差異に関する哲学的研究 900
山岡悦郎（三重大学）

●東アジア地域の思想・文化におけるルサンチマン研究 800
菅野孝彦（東海大学）

●唐宋心性思想にかかわるデータベース構築の試み 500
坂内栄夫（岐阜大学）

●永楽三大全の基礎的研究 700
鶴成久章（福岡教育大学）

●中国古代における太陽とロータスと鳥の図像的イメージと神仙思想 600
大形　徹（大阪府立大学）

●中国初期禅宗史と大乗戒運動 600
中島志郎（花園大学）

●隋唐時代における道観の基礎的研究 800
都築晶子（龍谷大学）

●柳詒徵とその周辺―東南大学知識人の発展的研究― 300
野田善弘（新居浜工業高等専門学校）

●古代より中世に至る日中古地理書の比較思想史的研究 700
薄井俊二（埼玉大学）

●大慧禅の思想史的研究 900
中西久味（新潟大学）

●道教の形成に及ぼした初期江南仏教の影響についての研究 700
神塚淑子（名古屋大学）

●六朝道教における死霊観の変遷と墓葬制への影響に関する比較宗教史的研究 500
菊池章太（東洋大学）

●清朝中国ムスリム学者劉智『天方性理』におけるミクロコスモスと世界認識 700
青木　隆（日本大学）

●明治前期における日中文化往来の研究―筆談資料と旅行記の整理・研究を中心として 1,100
陳　捷（国文学研究資料館）

●『婆沙論』の総合的研究 700
佐々木閑（花園大学）

●『中観明句論註釈』の文献学的研究によるインド・チベット中観仏教思想史の再構築 700
吉水千鶴子（筑波大学）

●慧均『大乗四論玄義記』に基づく中国南朝仏教学の再構築 1,000
菅野博史（創価大学）

●チベット仏教における「大中観」思想に関する研究 600
望月海慧（身延山大学）

●チベット文献木版印刷プロジェクトの総合的解明 500
伏見英俊（関西大学）

●大乗仏教起源論のための仏教美術史的基礎研究 800
荒牧典俊（京都光華女子大学）

●日本における宋代風水思想の受容と展開に関する研究 1,000
鈴木一馨（財団法人東方研究会）

●道の宗教性と文化的景観 1,000
鈴木正崇（慶應義塾大学）

●中国イスラーム山東学派におけるスーフィー哲学の受容と変容の研究 800
松本耿郎（聖トマス大学）

●日本における霊籤・御籤・神籤をめぐる思想史的展開に関する総合的研究 500
大野　出（愛知県立大学）

●墳墓壁画を中心とした魏晋南北朝絵画史の研究 900
河野道房（大阪府立大学）

●古代中国・中央アジアの仏教供養者像に関する調査研究 700
石松日奈子（清泉女子大学）

●西安碑林博物館所蔵碑誌彫飾文様6～10世紀基準作例の造形分析と系統化の基礎研究 900
山本謙治（阪南大学）

芸術学

●中国北朝墓誌工房の基礎的研究 400
澤田雅弘（大東文化大学）

文学

●上代文学における漢字使用の総体的研究 500
村田右富実（大阪府立大学）

●古代礼楽思想と勅撰和歌集の和漢比較研究 800
渡辺秀夫（信州大学）

●萬葉集における訓字の訓詁学的研究 600
内田賢徳（京都大学）

●中国の伝奇小説と日本の物語文学に関する比較文化的研究 500
山本登朗（関西大学）

●中世前期貴族社会における漢詩文の基礎的研究 400
仁木夏実（大阪大学）

●日中両国の初等・中等教育における漢字・漢文教育の比較研究 700
李　長波（京都大学）

●批注の体例―近世中期上方における明清漢籍受容の展開― 700
稲田篤信（首都大学東京）

●林羅山を中心とした江戸初期儒学者の日本古典文学研究についての考察 500
川平敏文（熊本県立大学）

●近代中国の口語散文に与えた日本文学の影響―周作人の日本文学受容をめぐって― 900
顧　偉良（弘前学院大学）

●新井白石『陶情詩集』の研究 600
詹　満江（杏林大学）

●日本および周辺地域に波及した祝穆編書の版本研究—建陽坊刻類書の伝播に関する考察— 900
住吉朋彦（慶應義塾大学）

●近世日本漢詩総集『日本詩選』についての総合的研究 800
高島　要（石川工業高等専門学校）

●中世儒学史・政治史資料としての年号改元文献の研究 600
小川剛生（国文学研究資料館）

●明清寓言の多様性に関する総合的研究 500
佐藤一好（大阪教育大学）

●『元朝秘史』研究における文学研究の構築—モンゴル英雄叙事詩研究を土台として— 800
藤井麻湖（愛知淑徳大学）

●収録字の配列方法より考察した中国辞書史の研究 700
花登正宏（東北大学）

●中国近代書論の文献学的研究 700
菅野智明（筑波大学）

●日本現存朝鮮古刊本の調査とその語学的・書誌学的研究 700
藤本幸夫（麗澤大学）

●1920年代、北京を中心とした文学結社の活動 700
斎藤大紀（富山大学）

●明清詩賛系文学の基礎的研究 700
高橋文治（大阪大学）

●口承性から見た漢代文学の研究 700
釜谷武志（神戸大学）

●戦国秦漢期の諺・歌謡・文学作品と物語—「テキスト」を核とした「語り」の展開— 500
谷口　洋（奈良女子大学）

●中国古小説の話題事項集成 600
富永一登（広島大学）

●日中説話文学史構築のための『法苑珠林』『夷堅志』の比較説話学的研究 1,400
三田明弘（日本女子大学）

●唐代著述考 600
孫　　猛（早稲田大学）

●韋君宜から見た中国革命史再構築の試み—作家、編集者、革命家の視点から 800
楠原俊代（同志社大学）

●スペイン国内に残る中国近世白話文献の学術的価値に関する研究 300
井上泰山（関西大学）

●申報掲載文明戯劇評の研究 1,300
瀬戸　宏（摂南大学）

●宋人題跋の文学的研究 500
西上　勝（山形大学）

●「芸術区」を中心とした中国都市文化の地域比較研究 1,000
牧　陽一（埼玉大学）

●現代中国における審美主義 600
伊藤徳也（東京大学）

●厳歌苓・虹影・黎紫書を中心とした華文文学の女流作家に関する総合的研究 500
楊　暁文（名古屋大学）

●江戸期著述の詩話の整理及び江戸時代の中国古典文学研究に対する多面的考察 700
道坂昭廣（京都大学）

●江戸末期に日本に伝わった中国伝統演劇に関する基礎的研究 700
赤松紀彦（京都大学）

●1940年代中華圏における文字の複数性—地域・メディア・制度の視角から 1,200
今泉秀人（大阪大学）

●石刻復元資料による柳宗元を中心とした唐代文学の文理融合型研究 600
戸崎哲彦（島根大学）

●日本現存『白氏文集』那波本諸本の調査収集と諸本の比較研究 500
下定雅弘（岡山大学）

●山口大学所蔵和漢古典籍の書誌学的研究と分類目録の作成 400
根ヶ山徹（山口大学）

●明代家刻本と白話小説：清平山堂を例として 500
中里見敬（九州大学）

●豊子愷に関する比較文学的研究 1,100
西槙　偉（熊本大学）

●日本統治期台湾における「大衆文学」研究—探偵小説を中心に 800
星名宏修（琉球大学）

●漢代五言詩歌の伝播とその文学的昇華の過程に関わる研究 200
柳川順子（県立広島大学）

●李頎詩の研究—盛唐士人を描写した詩をめぐって— 600
川口喜治（山口県立大学）

●18・19世紀の日中比較文学研究—頼氏・斎藤拙堂・眞龍院を中心に— 500
直井文子（東京成徳大学）

●中国古典戯曲総合データベースの発展的研究 1,000
千田大介（慶應義塾大学）

●柳宗元の古文研究—訓読と解釈— 1,000
黒田真美子（法政大学）

●日本伝存典籍による漢籍佚文の輯集と研究 700
河野貴美子（早稲田大学）

●中国近世唱導文藝研究—江南地域における実態調査 1,000
松家裕子（追手門学院大学）

●台湾原住民族における言語環境の変移および言語転換（日本語から中国語へ）の実相 1,000
下村作次郎（天理大学）

●乾隆朝初期における杭州詩人集団の研究 500
市瀬信子（福山平成大学）

●崑曲音律及び草創期太倉地区崑曲家研究 1,100
小川保博（長崎総合科学大学）

言語学

●漢語の影響下におけるモンゴル語近代語彙の形成 500
呼和巴特爾（昭和女子大学）

●清朝の言語政策と社会変動に係わる漢語の多層性に関する研究—公用語の脈流を視座に— 800
藤田益子（新潟大学）

●現代中国語における空間認識に関する体系的研究　400
丸尾　誠（名古屋大学）

●モンゴル文語（地域文語を含む）形成史から見た仏典モンゴル語の研究　1,000
樋口康一（愛媛大学）

●中国西南部の民族文字の字形集合に関する情報理論的研究　800
鹿島英一（九州大学）

●北京新出資料から見る清代口語の諸相　1,000
落合守和（首都大学東京）

●音韻と文法のインターフェースからの中国語の類型的特徴の再検討　1,000
太田　斎（神戸市外国語大学）

●アジア諸言語における喉頭特徴の相関　1,100
遠藤光暁（青山学院大学）

●中国黒龍江省におけるモンゴル族コミュニティーの言語接触と言語変容　900
包　聯群（東北大学）

●中国語における補語構造の非対称性に関する歴史的研究　500
伊原大策（筑波大学）

●音注の訓詁学的研究　200
森賀一惠（富山大学）

●戦国簡牘文字の地域差に関する基礎的研究　500
福田哲之（島根大学）

●「切字釈疑」訳注　400
富平美波（山口大学）

●『国語』の版本と校勘学の研究　1,100
小方伴子（首都大学東京）

●西洋人編纂資料と日本刊行資料による粤語語法の通時的研究　600
竹越美奈子（愛知東邦大学）

●ウイグル語仏典断片の文献学的研究　1,100
庄垣内正弘（京都産業大学）

●グロットグラムによる中国江蘇省南部方言の言語地理学的、社会言語学的研究　1,000
石　汝杰（熊本学園大学）

●契丹語辞典の編纂　1,300
吉本智慧子（立命館アジア太平洋大学）

●チベット語の古層を探る―東北チベット、アムド地方周辺の方言調査を通して―　700
海老原志穂（清泉女子大学）

●「訓点資料総目録平安時代編真言宗の部」の作成　1,000
月本雅幸（東京大学）

●正倉院文書訓読による古代言語生活の解明　900
桑原祐子（奈良女子大学）

●鎌倉時代における日本漢音の位相的研究　800
佐々木勇（広島大学）

●梵字音資料の日本語史的研究　500
沼本克明（安田女子大学）

●中国語話者のための日本語教育文法の開発と学習者中間言語コーパスの構築　1,000
杉村　泰（名古屋大学）

●初対面コミュニケーションにおける話題管理スキーマに関する日米中韓対照研究　600
三牧陽子（大阪大学）

●中国語または韓国語を母語とする日本語学習者の敬語能力に関する実証的研究　900
宮岡弥生（広島経済大学）

●漢字の認知上の特性と学習者の認知スタイルに配慮したオンライン型漢字学習教材の開発　500
前原かおる（東京大学）

●中国語および韓国語を母語とする日本語学習者の共起表現の習得に関する比較研究　1,200
玉岡賀津雄（麗澤大学）

●e-Learningによる外国人のための漢字教育システムの研究　900
林　敏浩（香川大学）

●中国語話者の複合語アクセント習得に関する研究　500
水野かほる（静岡県立大学）

●論文作成のための日本語の共起表現の抽出―日中対照コーパスの分析を中心に―　900
三国純子（文化女子大学）

●技術中国語のe-ラーニングシステムに関する研究　800
陳　淑梅（東京工科大学）

史学

●朝鮮古代中世金石資料の形態と銘の歴史・文化学的調査と研究　700
浜田耕策（九州大学）

●文書様式よりみた日唐古代官僚制の比較研究　700
西澤（古瀬）奈津子（お茶の水女子大学）

●入唐僧慧萼の求法活動に関する基礎的研究　600
田中史生（関東学院大学）

●日本中世禅宗の仏事法会と中国仏教　1,000
原田正俊（関西大学）

●徳川儒学思想における明清交替―政治と学問の〈正統性〉評価の変遷　1,200
眞壁　仁（北海道大学）

●古代日本列島における漢字文化受容の地域的特性の研究　800
佐藤　信（東京大学）

●中国法典・文物伝来からみた律令制形成過程の再検討　500
大隅清陽（山梨大学）

●漢方腹診書・鍼灸流儀書に関する書誌研究　1,500
長野　仁（神戸大学）

●内モンゴルに対する初期の蒙古例と清朝法制史　500
萩原　守（神戸大学）

●西夏時代の河西地域における歴史・言語・文化の諸相に関する研究　900
荒川慎太郎（東京外国語大学）

●近世中央アジア東部における歴史的聖者伝の系統研究　500
澤田　稔（富山大学）

●「朝鮮時代の朝鮮図と外国図および明代中国と江戸時代日本の朝鮮図に関する研究」 600
ROBINSON Kenneth（国際基督教大学）

●台湾総督府文書中の「番割」と官蕃交易—撫墾署と蕃産物交易所を中心として— 700
林　淑美（名古屋商科大学）

●前近代中国における売官制度の基礎的研究 1,000
伍　　躍（大阪経済法科大学）

●出土資料の分析による古代東アジアの服飾制度と社会秩序 900
小林　聡（埼玉大学）

●近代中国における民俗・象徴・儀礼と秩序の構成 800
丸田孝志（広島大学）

●大清帝国における国制としての八旗制の基礎的研究 900
杉山清彦（駒澤大学）

●唐代地方社会の祭祀儀礼の研究 500
江川式部（明治大学）

●「日書」よりみた地域文化と中国文明 1,100
工藤元男（早稲田大学）

●石刻史料からみた宋元代華北地方における仏教の社会史的変遷に関する基礎研究 1,100
桂華淳祥（大谷大学）

●東アジア古代王権と王陵の比較研究 1,000
東　　潮（徳島大学）

●墓葬資料による中国春秋時代社会の研究 500
小澤正人（成城大学）

●考古人類学的手法による台湾先史時台親族構造の研究 800
田中良之（九州大学）

人文地理学
●中国地誌の回顧とフィールド調査に基づく記述の実践による地誌学再考 800
小島泰雄（神戸市外国語大学）

文化人類学
●日本華僑社会における伝統文化の再構築と地元との関係 400
曽　士才（法政大学）

●20世紀前半に日本人が収集した中国民具についての文化人類学的研究 400
芹澤知広（奈良大学）

●中国南部少数民族の族譜に関する文化人類学的研究 200
瀬川昌久（東北大学）

●越境する文化と移民—海外における中国伝統芸能・音楽の伝播と変容に関する比較研究 1,100
王　　維（香川大学）

心理学
●漢字学習行動、漢字学習方略、及び漢字知識の関係と、その発達的変化 600
谷口　篤（名古屋学院大学）

挑戦的萌芽研究　新規

哲学
●東アジアにおける「礼」の特質と機能に関する研究 500
関口　順（埼玉大学）

文学
●中国古典文学における異文化イメージの形成 500
大野圭介（富山大学）

挑戦的萌芽研究　継続

哲学
●『医心方』所引の仏教関連書籍から見る東アジアの仏教医学伝播の諸相 600
多田（永瀬）伊織（皇學館大学）

文学
●謚法に見られる人物評価意識の変遷 500
三上英司（山形大学）

言語学
●音声言語情報処理技術を応用した中国語教育支援システムの開発研究 1,200
壇辻正剛（京都大学）

文化人類学
●中国の非物質文化遺産、鍾馗画と項羽祭祀の伝承と資源化に関する人類学的研究 700
韓　　敏（国立民族学博物館）

教育学
●日中両国の相互理解を育む教材・副教材の開発に向けた基礎研究 100
矢淵孝良（金沢大学）

若手研究(S)　継続

哲学
●中国隋唐時代の俑に関する総合的研究 800
小林　仁（財団法人大阪市美術振興協会）

若手研究(スタートアップ)　新規

哲学
●朝鮮時代における荀子学の総合的な研究 820
鄭　宰相（京都大学）

●道教内丹文献及び用語に関する基礎的研究 910
長澤志穂（南山大学）

文学
●平安時代仮名作品および漢詩文作品にみえる中国文学受容の様相 760
長瀬（金丸）由美（明治大学）

●明代白話小説における手法の展開 720
田中智行（徳島大学）

言語学
●現代中国語共通語における二重他動構文の類型論的研究 730
盧　　建（東京大学）

●長崎における唐話テキスト成立過程に関する研究 1,060
奥村佳代子（関西大学）

史学
●モンゴル時代華北における系譜伝承と碑刻 620
飯山知保（早稲田大学）

若手研究（スタートアップ）　継続

哲学

●道教における異常死者救済儀礼の研究—台湾南部地域を中心として—　430
山田明広（関西大学）

●1930年前後中国における歴史学の形成：学術の同時代思想史　600
竹元規人（福岡教育大学）

文学

●元・明時期における演劇と庶民文芸との影響関係の解明と文学史的位置づけの分析的研究　540
伴　俊典（早稲田大学）

●明末清初の白話短篇小説集の出版および収録に関する研究　1,230
廣澤裕介（立命館大学）

言語学

●中国口語起源漢語を含む漢文の訓読の実証的研究　910
唐　　イ（北海道大学）

●台湾南部客家語の記述的研究　1,070
田中智子（神戸夙川学院大学）

●外国語非言語伝達の習得と運用について—英語・日本語・中国語学習者を中心に　1,180
李イニッド（沖縄国際大学）

奨励研究

外国語・外国文学

●多人数大規模教室におけるコミュニケーションを中心とした中国語教授法の研究　590
須山哲治（早稲田大学）

史学

●契丹国（遼朝）時代の出土漢語資料に関する調査研究と資料集成　590
武田和哉（奈良市教育委員会）

学術創成研究費

学術創成研究費　継続

●目録学の構築と古典学の再生—天皇家・公家文庫の実態復元と伝統的知識体系の解明—　78,600
田島　公（東京大学）

研究成果公開促進費

学術定期刊行物

●ACTA ASIATICA：Bulletin of the Institute of Eastern Culture　2,000
財団法人　東方学会

学術図書

●宋学の西遷—近代啓蒙への道—　1,600
井川義次（筑波大学）

●江戸文人と明清楽　1,500
中尾友香梨（佐賀大学）

●類聚句題抄全注釈　2,400
本間洋一（同志社女子大学）

●「和漢」の世界　1,100
深沢眞二（和光大学）

●『談藪』研究　1,300
何　　旭（大東文化大学）

●中国語圏における厨川白村現象　1,200
工藤貴正（愛知県立大学）

●中国近世小説の伝承と形成　800
小松建男（筑波大学）

●中国語における東西言語文化交流　1,100
千葉謙悟（早稲田大学）

●漢語方言解釈地図集　2,300
岩田　礼（金沢大学）

●『児女英雄伝』の言語に関する研究　2,200
藤田益子（新潟大学）

●中国語・日本語音声の実験的研究　1,000
朱　春躍（神戸大学）

●明代の女真人　2,300
吉本智慧子（立命館アジア太平洋大学）

●唐宋時代刑罰制度の研究　2,300
辻　正博（京都大学）

●中国古代国家と社会システム—長江流域出土資料の研究　2,200
藤田勝久（愛媛大学）

●清代ハルハ・モンゴルの都市に関する研究　800
佐藤憲行（東北大学）

●清初対モンゴル政策史の研究　1,100
楠木賢道（筑波大学）

●広東の水上居民　1,200
長沼さやか（国立民族学博物館）

●清朝支配と貨幣政策　1,500
上田裕之（一橋大学）

データベース

●日本古典籍総合目録（UCEJB）　1,800
鈴木　淳（日本古典籍総合目録作成グループ）

●藤原定家の著作と平安朝古典籍の書写校勘に関する総合データベース（PTFTDB）　600
渋谷栄一（定家本古典籍データベース研究会）

●日本現存朝鮮古書データベース（DOKB）　2,700
藤本幸夫（麗澤大学朝鮮古書データベース作成チーム）

●台湾総督府文書目録データベース（AGTDB）　6,000
檜山幸夫（台湾総督府文書目録データベース作成グループ）

●東洋学多言語貴重資料のマルティメディア情報システム（MISMRMAS）　10,200
斯波義信（東洋文庫電算化委員会）

●中国語動詞補語用法オンライン辞書（CVRCOnline Dictionary）　900
砂岡和子（早稲田大学—北京大学現代漢語語義詞典編纂プロジェクト）

●アジア楽器図鑑データベース（AMICDA）　2,200
植村幸生（アジア楽器図鑑データベース作成委員会）

●漢字字体変遷研究のための拓本文字データベース（djvuchar）　4,700
安岡孝一（拓本文字データベース作成委員会）

学界展望へのご協力のお願い

『日本中国学会報』には毎冊、文献目録が載せられています。これは担当校の尽力によって可能な限り広く収集しているものですが、出版物が増加する一方の昨今、捜求はいよいよ困難になっています。是非とも執筆された御本人からのお知らせをお願いいたします。　次号第62集（2010年10月刊行予定）には、2009年（平成21年）の文献目録を掲載します。2009年1月～12月に刊行された著書・雑誌論文等をお知らせ願います。

書面による受付は廃止しておりますので、電子メールで下記アドレスへ送信ください。部門・分類（下記の各部門の分類参照）の後に、以下の順に記載願います。

著者（共著者も）、書名、出版社／　著者（共著者も）、論文名、雑誌名、巻（号）数

なお、論文・著書を送られる場合は、1編、1冊ごとに、部門・分類をご記入のうえ、以下の該当する部門の担当者にお送り願います。

○国内発行の刊行物に限ります。発表言語の種類は問いません。

［哲学部門］　池田　秀三

メールアドレス：

nihonchugoku.tetugaku@gmail.com

〒606-8501　京都市左京区吉田本町

京都大学大学院文学研究科中国哲学史研究室

［文学部門］　和田　英信

メールアドレス：

nihonchugoku.bungaku@gmail.com

〒112-8610　文京区大塚2-1-1

お茶の水女子大学文教育学部言語文化学科

中国語圏言語文化コース

［語学部門］　内田　慶市

メールアドレス：

nihonchugoku.gogaku@gmail.com

〒564-8680　吹田市山手町3丁目3-35

関西大学外国語学部

・アドレスは学会展望報告用のもので、次年度以降担当者が変わっても、引き続き使用する予定です。また、学会ホームページからも受け付けています。

各部門の分類は以下のとおりです。

○哲学部門　一、総記
二、先秦
三、秦・漢
四、魏・晋・南北朝
五、隋・唐
六、宋・金・元
七、明・清
八、近現代
九、琉球・朝鮮
十、日本
十一、書誌学
十二、その他

○文学部門　一、総記
二、先秦
三、漢・魏・晋・南北朝
四、隋・唐・五代
五、宋
六、金・元・明
七、清
八、近現代
九、民間文学・習俗
十、日本漢文学
十一、比較文学
十二、書誌

○語学部門　一、総記
二、文字・訓詁
三、音韻
四、語彙
五、語法
六、方言
七、教育・学習（教科書は含みません）

「国内学会消息」についてのお知らせ

「国内学会消息」は、来年4月発行の「学会便り」に載せることになっています。

2009年1月から12月までに開催されました国内学会の原稿は、来年（2010年）2月末日までに、下記宛にE-mailでお送り願います。郵送される場合は、フロッピーなどの電子媒体に入力したものを同封願います。入力いただいたものをそのまま印刷します。校正はありません。この点、あらかじめご承知願います。

ktomina@hiroshima-u.ac.jp
〒739-8522　東広島市鏡山1-2-3
広島大学文学研究科　富永　一登

「研究会等開催の案内」記事募集

「学会便り」には、会員の参加が予定される各種研究会等の案内を掲載いたします。

・1月から4月に開催予定のものは、12月発行の「学会便り」に、
・5月から12月に開催予定のものは、4月発行の「学会便り」に、

掲載します。研究会等の開催を計画されている場合は、研究会の名称、開催日時・場所、連絡先などを、上記アドレスにお知らせ願います。

なお、この「研究会等の開催案内」は、学会のホームページにも掲載することにしていますので、是非ご利用願います。

国内学会消息（平成20年）補遺

◎秋田中国学会

○春季例会

5月17日　於秋田大学総合研究棟二階講義室

・李白―翰林学士となる―　高橋彰三郎
・鶏肋古典渉猟記・回文詩等　野口　養吉

○秋季例会

11月29日　於秋田大学総合研究棟二階講義室

・東洋の心―その今昔―　蛭田　秀法
・「春秋左氏経」の「原左氏伝」からの抽出・編作とその成立過程について―隠公期「春秋左氏経」抽出・編作挙例及び「卒」の記事を中心に―　吉永慎二郎

（吉永慎二郎　記）

The Sinological Society of Japan
NIPPON CHŪGOKU GAKKAI
Number. 2
December
2009
Volume. 16

「日本中国学会報」論文執筆要領

日本中国学会

応募資格

1. 日本中国学会会員に限る。

使用言語等

2. 応募原稿（以下「原稿」と略称）は和文によるものとし、未公開のものに限る。ただし、口頭で発表しこれを初めて論文にまとめたものは未公開と見なす。

原稿枚数等

3. 原稿は校正時に加筆を要しない完全原稿とする。
4. 原稿枚数は、本文・注・図版等をあわせて、400字詰原稿用紙55枚以内（厳守）とする。注も原稿用紙1マスに1字を納める。ワープロ使用の場合は、用紙サイズはA4、1行30字毎ページ40行、文字は10. 5ポイントを用いる。なお、第1ページの見易い場所に、投稿原稿を1行20字毎ページ20行に変換した場合の枚数を明記する。原稿量の上限は、字数ではなく、枚数によるので注意する。
5. 図版を必要とする場合、占有面積半ページ分を400字詰原稿用紙2枚の割合で換算する。図版原稿は原則としてそのまま版下として使用できる鮮明なものとし、掲載希望の縦・横の寸法を明示する。

体裁・表記等

6. 原稿は縦書きを原則とする。特に必要とするものについては、論文審査委員会の議を経て、横書きを認めることがある。
7. 引用文は内容に応じて原文、訳文、書き下し文のいずれかを用いるものとする。原文の場合は該当する訳文または書き下し文を、訳文または書き下し文の場合は該当する原文を本文中または注に明示する。ただし、一読して疑問の生ずる余地がないものについては、省略することを認める。中国語以外の外国語の引用もこれに準ずる。校勘・版本研究等内容上適切と認められるものについては、原文のみ引用することを妨げない。原文に返り点・送り仮名をつけることは原則として認めない。日本漢学・日本漢文等に関する内容のもので、訓点の施し方自体を論ずる場合はこの限りではないが、加算された印刷費は執筆者の負担とすることがある。
8. 原稿は正漢字体・常用漢字体のいずれの使用も可とするが、印刷にあたっては全文を正漢字体（旧字）に統一する。活字は本文9ポイント、括弧内は8ポイントを、注はすべて8ポイントを使用する。特に本文括弧内を9ポイントにする場合および内容上特に異体字であることが必要な場合は、当該箇所に明記する。
9. 注は、各章・節ごとにつけず、通し番号を施して全文の末尾にまとめる。割注は用いない。
10. 中国語のローマ字表記は、執筆者の選択にゆだねるが、同一論文中にあっては、ウェード式・漢語・拼音方案等何らかの統一があることが望ましい。ただし、特殊な綴りで通用している固有名詞（例孫逸仙Sun Yatsen）、本人が自分の名前に使用している綴りについてはその使用も認める。日本語のローマ字表記は、ヘボン式の使用を原則とする。

論文要旨

11. 応募時の原稿には400字5枚以内の論文要旨を添付する。
12. 学会報掲載の論文要旨は、英文とする。論文掲載者は、完成原稿提出時に、400字3枚（1200字）程度の日本語要旨を添付する。

原稿提出

13. 原稿などは必ず書留により下記に郵送するものとし、毎年1月20日までの消印のあるものを有効とする。持参は認めない。

〒113-0034 東京都文京区湯島1-4-25
斯文会館内　日本中国学会

14. 応募の際、審査を希望する部門（哲学・思想または文学・語学）の別を原稿第1ページに朱書する。ただし、論文の内容により、両部門にわたる審査を希望することができる。
15. 応募時には、本文・要旨とも複写コピーを用意し、計4部を提出する。（事故に備え、提出前にあらかじめ自家用のコピーをも作成しておくことが望ましい。）又、原稿は原則として返却しない。
16. 応募時には、①原稿のやりとりをする際の連絡先（住所、電話、メールアドレス）、②現在の所属先、③最終出身大学及び修了（退学）年を書いた紙を提出する。（書式は自由。）

校　正

17. 執筆者校正は再校までとする。校正時の加筆・訂正は初校段階に限り、必要最小限のものについてのみ認める。加筆・訂正の結果加算された印刷費は、執筆者の負担とすることがある。

抜　刷

18. 掲載論文の執筆者に対しては、抜刷30部を贈呈する。抜刷の追加を希望する場合は、初校返送時に追加所要部数を連絡する。その分については、実費及び増加送料を本人負担とする。

そ の 他

19. 掲載論文については、電磁的記録として記録媒体に複製する。これを日本中国学会の会員、図書館、研究機関、それらに準ずる組織及びその他の公衆に譲渡、貸与、送信すること、またその際に必要と認められる範囲の改変を行うことがある。

（昭和62年10月11日制定）
（平成13年5月13日修正）
（平成14年10月13日一部修正）
（平成15年10月5日一部修正）
（平成19年10月7日一部修正）
（平成20年5月17日一部修正）
（平成21年10月11日一部修正）

編集：広島大学文学研究科　富永一登　〒739-8522　東広島市鏡山1-2-3
発行：日本中國學會　〒113-0034　東京都文京区湯島1-4-25 斯文会館内　FAX.03-3251-4853　メールアドレス：ssj3@wwwsoc.nii.ac.jp